Ⅲ　莫言及び他の現代文学の作家

一　莫言の『豊乳肥臀』

一

五十万字というこの長編小説『豊乳肥臀』[1]を読みおえての感想は、「偉大なる駄作」といった矛盾したものであった。

莫言（一九五六～）のこれまでの作品は、人のより低い視点から見た意表を突く多彩な語彙と、人が生きるための必須の反応である生理への執着による迫力があった。こういう書き方によって描かれるのは、この世ならぬ奇抜にして且つ正常な、男女の生へのあらがいであった。こういう世界を織りなすために紡ぎ出される莫言の文章は、男と女の生命の躍動（エロス）へと必然的に集約された。これが莫言の独自の味わいと言えるのかもしれない。たとえば『紅高粱家族』[2]などを読みおえたとき感じた、圧倒され、唸らされる満足感などはこうして生じたのであったろう。少なくとも、男女の愛のエロスを感じたものだった。

だが、今回はそういう熱い思いを感じなかった。

それは何故なのか。

一つには莫言の書き方が変わっているからであろう。文章がひどい。ある中国の友人などは、読むと吐き気がすると言う。それほど露悪的な書き方をしている。

また一つには、莫言の狙いが、作品内容の集積によって何らかの意義付けを読者に感得させようとする、これまでの有り様とは違っているからに相違ない。今回は専ら「故事」（お話）を語ること、つまり筋を追うことに重点をかけているのだ。

ただ、この二点は、作品が起こしてしまった善し悪しの評価とは別に、新しい傾向に違いない。そのことをレポートするのが、この文章の意図である。

二

『豊乳肥臀』という題名は、訳せば『でかパイ、でか尻』とでもいうニュアンスを人に感じさせるもののようだ。したがって、先ず題名が穏当さを欠き、優雅さが欠けることに議論があったようだ。たとえば、徐懐中は「書名は荘重さを欠くようだが」と言うし、汪曽祺も「書名は作品と等しくないが、書名だって〝大雅〟を傷つけない。〝でかパイ〟〝でか尻〟だって驚愕を引き起こすべきことではない」とわざわざ言っている。(3)

作品の題名によって煽情的に人を引きつけ、売り上げを多くしようとすることは、何も事新しいことではないが、ここ一、二年とみに行なわれていることである。(4) 莫言の小説も、このような「媚俗」（世俗に媚びること）によって題名が付けられたのではないか、と非難する議論が出てきたらしい。さらに、意外にそういう非難が広まり高まったのかもしれない。だからこそ、作者莫言自らが、『光明日報』にわざわざ「豊乳」（すなわち「でかパイ」）は母親

を象徴し、「肥臀」（すなわち「でか尻」）は彼の故郷である山東省の高密県のこと、つまり大地を象徴しているのだ、と釈明しなければならなかったのであろう。[5]

その文章は自ら自分の作品の解説をしているわけだから、『豊乳肥臀』という作品を考える上で大変重要なものであるが、今直ちに作品解釈に入るわけではないので、ここでは別の文章を取り上げたい。

それは、『文芸報』九六年四月一二日の第七面に引用された、朱晶「缺少批評」という文章である。これは、もともと『長春日報』に掲載されたものである。朱晶は言う。

＊「第一回大家・紅河文学賞」の表彰式が北京人民大会堂で行なわれ、賞金が一〇万元もした。幾つかの新聞雑誌が受賞者の受賞の言葉を転載し、作家自身が『光明日報』に自己弁護の文章を目をそばだたせるように発表した（本がまだ広まらないうちに、また批評がさほど起こらないうちに、作家自らが立ち上がって弁解するなんて事は、文学史上でも珍しいことである）。その後、『豊乳肥臀』〝騒動〟なるものをでっち上げて〝評論家〟を非難する文章が出た。僅か千文字に足らぬ短文ながら、「道学者然とした偽君子」だとか「君子国の先生」だとか「評論家の醜い内心の底」とか「例の〝階級闘争〟面をした〝同期の桜〟組たち」とか「現代の道徳家たち」等々と、大げさなレッテルを張りつけた。別の一篇は短刀直入に「評論家よ、〝乳〟や〝尻〟を見ないですまされるのか」と言い放った。[6]

この文章には、『豊乳肥臀』をめぐっての情況や作品そのものへの批判などが書いてある。そして朱晶は、『豊乳肥臀』という作品に対する批判がなされないのはおかしいと述べるのだが、当面引用された箇所から、『豊乳肥臀』

という書名に異論を持つ者がいること、またそれに対して、題名に違和感を感ずるのは古い道徳観があるからだと『豊乳肥臀』を弁護する文章があったことがわかる。その弁護する文章はひょっとすると、莫言の『豊乳肥臀』の内容の新しさや先鋭さを理解しないで、題名に難癖をつけたり、内容の一部を道徳的に批判することに対する反論であったのかもしれない。したがって、引用文中にも、「道学者」とか「君子」などの言葉が散見する。さらに、その「道学者」や「道徳家たち」というのが、「例の〝階級闘争〟面をした」とあるように、けっして封建主義的な古い道徳観念を指して言っているのではなく、今なお「評論家」として活躍している、硬直した判定基準を持った人たちを指して言っていることは明らかであろう。つまり、共産党の文芸観として作品に教育効果を求めること、すなわち読者を向上させるような効果をもたらす模範的な文章を書けと強制する者たちを指して言っているのである。

ただ、朱晶の方からすれば、そういう反論の文章は、『豊乳肥臀』を弁護するというより、異議を称える者を罵倒に近い粗暴な言い方で非難するものに思えたようだ。確かに、引用された所から判断するに、多分に思い上がった者の性急さ、つまり〝純文学〟を理解しうる者がわからぬ者に対して取るような、他人を小馬鹿にした態度からするもの言いが感じられるのであるが、残念ながら、肝心の元の文章が見られない。

いずれにせよ、先ず題名の刺激性が問題であったことは確かなことのようだ。

だが、当然のことながら題名についての議論は、題名そのものに由来するのではなくして、本の内容の出来不出来に関係する。少なくとも読者に納得いく内容であったかどうかが大いに関係する。だから、続けて、朱晶は言う。

＊書名なぞあれこれ議論すべきでないという論に賛成する。小説が本当によく書けていたなら、たとえ書名が

優雅でなくても、それは枝葉末節なことに属するからだ。でも、『豊乳肥臀』はどうやら書名が不穏当と言うだけではないようだ。(7)

このように朱晶は、書名が問題なのではなく、内容が問題なのだと、きわめて常識的な判断をここでは下しているが、もともと朱晶の文章は、『豊乳肥臀』に対する批判が少なすぎることを問題にしていて、その理由として、批判を圧殺するかのような動きがあったことを指摘しているのである。

内容に対する批判よりも、題名に対する批判が先行し、題名の適否どころか善し悪しに関して攻防が繰り広げられたことは、徐懐中や汪曽祺、また謝冕といった錚々たる作家や評論家のいる審査委員会の重みなるものが影響しているに違いない。(8) 彼らのような一流の文学者が認めたのであるから、この作品は良い作品に違いないのだ。良さがわからないのは、文学がわからないのと同じではないか、ということになる。だが逆に言えば、こんなにも権威ある委員たちが決めたにもかかわらず、莫言の『豊乳肥臀』は賞を得るにふさわしい作品ではないと言って納得しない者がかなりおり、そういう者たちが題名の不謹慎さを突破口として嚙みついたということかもしれない。こういう不満は、事柄自体大した問題ではなく、常識的に判断すれば済むことであるが、本来異議を称えた者たちも、題名よりも内容そのものに不満でありながら適切な論を展開できないからこそ、題名なんぞに固執してその教育的意義を問題にしたのであろう。

そうであるなら、現在はまさに、これまでの中国共産党宣伝部が作家協会を通じて作り上げてきたところの文学なるものが解体する時期にあること、もしこう言っては言い過ぎになるならば、そういう文学の過渡期にあることがわかる。一方、新しい文学の基準なるものも、確立しているわけでない。せいぜい〝純文学〟の独立性を強調す

る程度である。だから、作品内容そのものを判断する基準を、一般の読者はもとより批評家も持っていない情況に現在はあり、混乱があるといえよう。

したがって、既成の著名な作家や権威ある評論家の意見にとらわれず、遠慮せずに論争すべきであるとするのが朱晶の主張だが、この常識的な平凡な主張の持つ意味は大きいといえよう。

三

朱晶の批判文章には『豊乳肥臀』の内容を手短に要約した所があって便利なので、引用しておこう。

＊小説は始まりから、人と家畜の難産の描写を対比しておこない、すこぶる目をそむけさせる。一方に魯氏の「わめき」があれば、一方には黒ロバの「悲鳴」が鳴り響く。産道に手を突っ込んで子供のロバを引っ張り出すことが描かれるが、嬰児の誕生も同じ手段であることが描写される。日本の鬼めが山東の東北を血で洗ったあと、一方では村民が慟哭しながら野辺送りをしているのに、一方では又、烏が腐った死体を争い食う情景を興味津々と描き出す。猥褻で煩瑣な自然主義、突飛なイメージ、それを叙述の諧謔で補う。美と醜、正義と悪行とを一つ鍋で煮るやり方は、莫言の手慣れた筆法である。小説中にある、山東高密の人々が糞尿でドイツ人の鉄道敷設に抵抗することや、日本の侵略者を火攻めにすることや、解放戦争、土地改革、〝三反五反〟、〝四清〟、〝文革〟、改革開放後の経済発展、腐敗反対清廉の呼びかけ等、これらが同じような嘲笑の調子で変形されて処理されている。(9)

長編小説の粗筋を紹介することは難しい。難しいだけでなく、かなりの紙幅を要する。小説にせよ映画にせよ、それは読んだり観たりした者でなければ、どんなに巧みに概括してもおもしろさは伝わらない。そこで、『豊乳肥臀』の内容理解だけならば、朱晶のこの文章だけで十分であると私は思う。小説に現れる事柄がほとんど列挙されているからである。そもそも、この小説は「故事」のおもしろさそのものに重点をかけているのであるから、粗筋をいくら工夫しても、粗筋だけでは所詮おもしろさは伝わらないのだ。

『豊乳肥臀』は、引用文にあるように、人と家畜の出産の場面から始まる。それはどちらも大変な難産である上、同時に始まったのでスムーズにいかないのであるが、お産がスムーズにいかない理由にはもう一つ、日本軍の襲撃がある。日本軍の襲撃を予知して村人は逃げ出していて、お産を手助けする人がいないのである。そこへ日本軍の爆撃まで始まる。莫言は主人公となる上官金童の誕生までに、単行本で約三〇頁ほどの紙幅を費やして難産の様子を描くのである。こういう生理的現象への執拗さは、莫言の大きな特徴であろうが、必ずしも気分よく読めるものとは言えない。それは、烏が死肉を食い散らかすという無残な情況の描写にも現れているが、しかし、たとえば彼の長編『紅高粱家族』にあった、人の死肉を食いにくる野良犬と主人公ら子供たちとの生死をかけた戦いの描写のような集中力と、人肉を食った犬を食ったからこそ主人公たちは栄養がついて生き延びられたのだという冷徹な視点による描写、つまり、その残酷な描写がなければならない必然性（作者の迫力）とが、この難産の場面には見られない。ただ単に難産の有り様を描くだけであることが、露悪的な書き方だという所以である。

難産状態にある人間と家畜との対比的描写には、小説の発端として、人物や情況の説明といった付加された意義と、筋の展開への配慮とが窺われる。それは作者が当然なすべきことではあるが、その点を考慮しても、露悪的な技巧を以て読者を引っ張っている、迫力のない作者の作為だけが、私には目についた。

以上のことは、この小説の最大の欠点であると私は思うが、それはひとまず置いておいて、朱晶の文章をもう少し続けて見てみよう。

＊作品の趣旨は母親と大地とを賛美したものだと言われている。だが、この八人の娘と一人の息子を産み育てた母親の、運命との抗争は殆ど全部「性」と「本能」とに帰結してしまう。彼女の子供全部が夫の血肉ではない。彼女は仏を信じては和尚と私通し、キリスト教を慕ってはスウェーデンの牧師と愛し合い、夫に報復するために伯父と乱脈に通じたり、或いは流れ者に任意に〝身を任せ〟たり、独り者に〝凌辱〟されたりする。息子や娘に対しても、一方では彼らのために恥を忍び重荷を負って苦労しながら、一方では娘の密通のために門番の役までしてやったり、息子を励まして片乳の女とベッドを共にさせたりする。このように、母親の倫理道徳に対する反逆を描写するが、それが結局母親を賛美することになるのだろうか、それとも戯画化しようとしてなされているのだろうか。(10)

上官家に嫁いだ魯家の娘（璇児）が、実質的なこの本の主人公である上官魯氏である。つまり主人公上官金童の母親なのである。彼女は美人で、小さな足と豊乳肥臀とをもった活発な女であったが、なんと既に七人もの娘を産んでいた。今、この難産によって女と男の双子を産んだのである。したがって、八人の女の子と一人の男の子ということになる。単行本の「七補」の章でわかるのは、この合計九人の子供たちは父親がすべて夫（上官寿喜）ではないことである。最後の双子の父親に至っては、スウェーデン人の牧師なので、唯一の男の子上官金童も金髪である。夫でない男と交わって子供を産まねばならなかったことが、彼女の運命との抗争になるのかもしれないが、上

官家への復讐のように交わる男の中にはレイプまであって、夫への報復なるものの必然性が弱い。そのため、確かに朱晶の言うように、母親上官魯氏の言動は、彼女の放恣な「性」と「本能」に帰結してしまい、とても倫理道徳に対する意識的な「反逆」などとは言えない。

また、それぞれの父親が誰であるかを「七補」の章が最後に明らかにするのだが、こういったやり方は、読者に最後には種明かしをして安心させる旧小説のような感じを私には与えて、「七補」の章の必要性に疑問を感じた。莫言は、母親そのものの形象よりも、母親から産まれた九人の子供たちの誕生譚、つまり「故事」に重点を置いたのであろう。だから、誕生の始まりにも言及しなければならなくなったのであろうが、そのことより生じた欠点をもまぬがれなかったといえよう。

＊乳房が小説の焦点、重点、一貫するものであるというのは、言い過ぎではない。書中随所に乳房に対する点描、細かい描写、連想などがある。主人公上官金童などは女の乳房にぶら下がって大きくなったのだ。彼は母親の乳房から離れられないばかりでなく、姉たちの乳房にも垂涎三尺で、甚だしくは女モデルの乳房に突き進んでショーウインドーのガラスを壊しさえする。作品は上官金童の口を通じて「乳房に対する愛護と関心の程度が、ある時期の社会の文明度を計る重要なメルクマールである」と宣言する。そこで、「国際乳房節」を準備し、「アジアを出て、世界に突き進む」。このような誇張は、結局のところユーモアなのか、それとも病態なのか。[11]

乳房の持つエロチックな面に囚われると、朱晶のような批判が生じ、この小説の誇張具合に呆れざるをえないだ

ろう。上官家が、嫁の魯氏に他人の子供とわかっていながらも、女の子を七人まで産ませ、さらに今回も彼女に子供を産ませたのは、ひとえに男の子が欲しかったからにほかならないのだ。この男子による跡継ぎという観念の凄まじい執着こそ、この小説が巧まずして表出した中国社会の深層心理である。『豊乳肥臀』の収穫といっていいものかもしれない。この土着的な男子尊重の観念があればこそ、小説は百年ほど時間を遡ってもリアリティをもち得たのである。また、山東省の地方色が出せたのだともいえる。そして、何の取り柄も能力もない上官金童が母親の上官魯氏を押し退けて、主人公になれたのである。彼はただおっぱいをしゃぶり、おっぱいを揉むことしか考えないが、そこに目を付けた従兄弟の援助で、ブラジャー会社の顧問となって改革開放の現代にも生き残るのである。解放戦争後になると子供たちも年齢が高くなってきたこともあって、彼や彼女らが動き出し、母親の影は薄くなる。上官家の星である金童は、独り立ちして事件の中心人物にならざるをえなくなる。しかし、改革開放の現代中国に生き残る上官金童には、もはや精彩はない。それは、彼には生活能力がなく、何よりも金が無いからである。彼の華麗な生活がパトロンあってのものであることが明白になるからである。これは、跡継ぎとか男子尊重といった共同幻想が、改革開放の中国にあっては既に薄れていることを、見事に反映していよう。強いて言えば、上官金童は、上官家の跡取り息子としてではなく、人並み以上にエロチックであるがゆえに現代に生き残れたといえる。性の問題、ここでは金童の乳房への執着が、人々の関心を呼び起こしているからである。すなわち、金と色こそ、現代中国の共同幻想、この小説のリアリティなのだといえよう。

ついでながらこの従兄弟について一言しておくと、彼は父親の関係で共産党から追われる身となり、小説の途中で舞台の高密を脱出せざるをえなくなるのだが、なんとこの男は韓国に渡っていてそこで商売に成功し、「南韓巨商」となって戻ってくるのである。

このように述べてくると、この小説の筋の展開が、いわゆるリアリズムなどには囚われず、「突飛なイメージ」を描くことに重点があることがわかろう。もちろん倫理道徳にも囚われない。だから、作品における高密の歴史といっても、今日に役立つ特別な意義のあるものではないし、未来を光り照らすものでもない。たとえば鉄道敷設反対闘争を例に見ても、ドイツ人は糞尿に弱いという風聞から、上官家の曾祖父が村の人々を集めて、鉄砲に対するに糞尿を以てしたという、エピソードの面白さに重点があるのである。確かに「嘲笑」的な描き方がなされていると言われても仕方がないが、そもそも『豊乳肥臀』における歴史は、「故事」（お話）なのであるから、始めから態度が違うのである。歴史の持つ峻厳さとか意義とかいったものは排除されているのである。そんなものが、これまで役に立ったことがあっただろうか。役に立たなかったことは、次々に継起した各種の政治運動が身を以て教えたことではないか。もちろん、この歴史に未来への光などありはしない。だから、この小説に描かれる「土地改革」も「大躍進」もみんな、「故事」としてのおもしろい話の面からだけ描かれるのである。「解放戦争」を含めて、描かれる各種の運動が高密の人々の指針になったこともなければ、幸せをもたらしたわけでもなかった。

おもしろ可笑しいエピソードに重点を置いて描くのは、ある意味で、作者のギリギリの選択であったのではないかと、私は思う。歴史解釈に異を唱えるほどの哲学思想も社会的基盤も、今の現代中国にはない。また莫言は、思想活動家でも社会改革家でもない。せめて、長嘯してみせることができるだけである。ということであれば、歴史を解釈するのではなく、おもしろ可笑しく語ってみせようではないか。このように歴史は表面上「嘲笑」されているが、人々にとっての歴史が、「故事」となって、意義付け（あるいは峻厳さ）から離れることは、現在の中国社会がイデオロギーからかなり自由に離脱出来ていることを示すものである。だから、すべてを「故事」にして語ることは現在の中国の一つの到達点であるといってもいいだろう。もちろん、離脱すればそれで良しとするものではな

い。この小説はまだ未熟なところが多く、必ずしも説得力があるとはいえない。そこで朱晶のような反論が現れ出てきたわけだ。

朱晶の論は共産党からの追い風を受けている。たとえば『文芸報』に見られるように[12]、「主旋律を発揚しろ」（文芸は「人民の事業」に奮闘している人々を歌いあげよ）という呼びかけが続いている現在の文学状況があるから、この古くからの意見はかなりの範囲で、根強く支持されているに違いない。

＊『豊乳肥臀』の中には確かに作者の芸術的才能の特色を示す所があるし、作者の深い歴史的反省を幾つか表現した所もある。しかし、これまでで最高の賞金額を得た当代文学の「大作」に要求すれば、また中華民族百年の偉大にして悲壮な歴史より比べれば、『豊乳肥臀』の歴史や人間性や家族に対して採用した荒唐で軽薄な態度が、この小説を成功作とは信じがたくさせている。[13]

念のために言えば、朱晶はけっしてイデオロギーを主張しているわけではない。ただ態度が真面目でないと言っているにすぎない。だが、この「真面目」こそ一つのイデオロギーだと言っていい。真面目とは何かと大真面目でここで議論しないが、莫言の態度なるものは、まさに「真面目」でないところにある。それは歴史に囚われることなく、歴史を見直すことである。

もちろん、『豊乳肥臀』には意図的な諧謔と荒唐と軽薄、そして嘲笑とがある。それらは歴史に付着した「手垢」を振り払い拭き清めるために、必要な手段だったと言えよう。　たとえば、この小説のなかで大変魅力的な人物である「司馬庫」なる人物がいる。[14]

彼の粋な姿に、二番目の姉（上官招弟）が惚れ込んで一緒になる。彼は地主の息子で財力と能力とを持っている上、行動が瀟洒である。彼は金に任せてトーキーを買ってきて、映画を初めて村人に見せる。画面に見るキスシーンにいかに興奮するかなど、なかなか読ませる場面もある。上官招弟もこの男に惚れ込み、正式の結婚であるかどうかにこだわらない。後の土地改革の時期になると、共産党員になった五番目の姉（上官盼弟）やその夫から、司馬庫や二番目の姉は批判されることになる。彼に対する批判大会では、貧農の一人が彼の良かったところを言い出して、大会が続けられなくなる。司馬庫は上部の裁判に回されることになり、この地を出発する。護送団が河を渡る際に、彼は水に飛び込んで見事に逃げおおせる。その後、司馬庫は山東の東北一帯で匪賊として名を馳せるが、最後には逃げ切れぬと悟って自首して出て来て銃殺される。こういう一連の彼の言動には、お上に反逆する一人の男だてのような恰好良さがある。その瀟洒な活動に二番目の姉ばかりでなく母親も、そして村人も拍手し援助を惜しまない。彼が地主の息子だから悪かったのではなく、地主の息子だから出来た事を可能な限り多く描きだす。莫言の筆は彼を語るとき、実に活き活きしているが、だからといって彼がまったくの反逆者として英雄的に形象されているわけでもない。彼の最期の言葉は、銃殺を見物する大衆の寄せた期待を裏切って、反逆の悲壮なことばではなく、「女とは何といいものか」と言うことばであった。

司馬庫と二番目の姉との間に出来た子供が司馬糧であり、この子つまり主人公の従兄弟が、後に「南韓巨商」となって戻って来て、改革開放によって大転換を経た高密の経済推進者になるのである。

筋書きだけを、それも大筋だけを、このように書いてもわかるように、山東省高密県を舞台に次々と織りなされた事件が、上官家を中心に描かれる。八人の娘たちの嫁ぎ先を追うだけで、大パノラマが繰り広げられることになる。彼女たちの行く末を追う興味は、次々に繰り広げられる「故事」を聞く楽しみにほかならない。司馬庫の批判

闘争大会でも、地主がいかに悪いかなどということは描かない。貧農たちが地主もこれこれの良いことをしてくれたと言い出した時の、この大会を主催する、共産党員である五番目の姉やその夫の慌て振りや、上部から来た「大人物」の対応を物語るのに重点がある。ここに繰り広げられた「故事」による可笑しさや意外性が狙いだといえる。だから、随所に共産党の硬直した作風を風刺したと思える場面（たとえば、馬と牛とを掛け合わせようとすることや、寡婦を無理やり男と再婚させようとすること等）が、この小説には出てくるのだが、『豊乳肥臀』はけっして共産党を批判したり、共産党に反対したりするだけの小説ではない。[15] そのような次元から離れようとしていると私は思う。今さら、共産党批判をしたところで、何程のことがあろうかと思う次元に作者も読者も来ているのではなかろうか。まして過去の事件をあげつらったところで何の益にもならない。共産党というのも、直接的具体的には上官家の一員であったのだし、反対側の人間も上官家の一員であったのだ。それが歴史ではなかったか。少なくとも一地方一家族に限定して見る歴史からは、すべての事件が歴史というものであり、その事件を起こしたのは自己の一員たちであったのである。事件を「故事」として捉え直すことこそが、この小説の意図なのである。歴史は自分たちに戻るものなのだ。そうであるならば、それを「故事」として語り継ごう。そこにはイデオロギーはいらない。その時その場面で活躍する人物こそ必要ではないか。むしろ過去の事件を事件として「故事」とする（お話する）方が、おもしろ可笑しいではないか。私には、莫言の態度がこのように見えてならなかった。

莫言はこの小説について、次のように言う。

＊私はこの小説の中で、無謀にも私の故郷高密県東北郷の百年の歴史を芸術的に描き出そうと思った。私は、母親を、そして人民を、大地を真心から歌いあげようと思った。私は、植物と対話し、動物と談話することを

渇望した。もちろん私はまた、光栄ある高密県東北郷の背後にある落伍面と愚昧面とを批判しようと強烈に思った。しかし、結局才能に限界があり、私の芸術的野心も完全には実現しなかった。[16]

四

『豊乳肥臀』に出てくる日本について、一言触れておこう。日本は、「日本軍」として小説の始まりから出てくる。それは侵略し、襲撃し、爆撃してくる「日本鬼子」として出てくるのだが、彼の『紅高粱家族』に出てきた日本軍のような具体性を、『豊乳肥臀』は伴っていない。具体的な悪行をする描写がほとんどないのである。難産で始まり、日本軍の爆撃があり、日本軍が侵略してきたというのに、「日本鬼子」の悪行は描かれずに終わる。むしろ匪賊と国民党と共産党の争いと蛮行の方が、具体的である。五七年からの「反右派闘争」や「大躍進」後の三年の自然災害時期の愚行の方が、詳細であるから痛ましく思える。日本軍が少しも悪いことをしていないというのが、私の印象であった。

もう一つ、日本に関する「故事」がある。三番目の姉（上官領弟）と愛し合っていた「鳥児韓」という男が十数年振りに戻ってきたのである。彼は、日本の北海道の山林の中で十五年過ごしてきたのだという。そこで、地元の中学校で、彼の報告会が開かれた。この報告会は二十数回も開かれたのだが、その後、彼の異常な体験談は人々を感動させ、興味を呼んで、高密東北郷を五十回も巡回講演することになった。彼の口は今や滑らかになり、伝奇的な話にも磨きがかかった。ちょうど大躍進の時期のことである。彼の話は恰好の息抜き、娯楽の一つとなったのである。

彼の話す日本の北海道には狼が出てきたりして、いかにも莫言が作り上げた話であることが明白であるが、それほど悪人やひどい仕打ちをする日本人が出てこないことも特徴であろう。彼に逃げ道を教えたのも、一人の日本の女であった。北海道の炭鉱から密林に逃げ込み、熊との格闘や狼との不思議な情の交換などがあって、山林沿いに逃げて海岸に出てくる。彼は日本人の漁師たちを襲おうとはしないので、そこの漁師たちに結局見つかるのであるが、その時は日本の敗戦後二年目であった。こうして彼は中国に十数年振りに帰ってきたのである。

鳥の生まれ変わりのような、この「鳥児韓」をめぐっては、彼を愛した上官領弟とともに、不思議な話が多い。日本の北海道の山林生活も、摩訶不思議な話として描かれるのであって、決して炭鉱夫として連れ去られ、過酷な労働に従事させられ、虐待を受けたというような話なのではない。日本帝国主義に反対だの、軍国主義がどうのこうのと言うのでもないのである。まるで、異国への旅に出て、不思議な体験をした、冒険譚そのものを楽しむかのようである。日本人からすれば信じがたい北海道山中の生活や日本脱出の話も、中国人からすれば、いかにも現実にありうることのように読めるらしい。少々、ディテールが怪しくとも、戦争中に日本へ連れ去られ、北海道で逃避生活を送って帰ってきたことなど、珍しくない話として定着しているのである。

五

歴史を光輝く道しるべとするよう、中国作家協会主辦の『文芸報』などは呼びかける。過去の体験を未来の教訓として、一つの方向へ導くことは、共産党の指導下の文芸のあり方として当然なことであった。しかし今や、文芸を教育から独立させようとする作家や評論家などからは、こういう方向は無視され、一顧だにされなくなっている。

莫言の『豊乳肥臀』は、まさにそういう方向に背反する小説としてあり、それは作者莫言が意図したことに違いなく、莫言だけがそうしているというわけでもない。歴史を他者が言うとおりのものとして受け入れるのではなく、自らの見聞と思考とによって捉えなおそうとする動きは、ここ数年顕著になってきている。たとえば『白鹿原』[17]などは作家自らの手で歴史を捉えなおす作品の代表的なものといえよう。作者陳忠実（一九四二～）はきっと真面目な男と見えて、がっしりとした文体で正面から一地方の変遷を描こうとしている。

この『豊乳肥臀』は、『白鹿原』のような真面目な態度をわざと取らずに、歴史を「故事」の世界に押し込めようとしている。「真面目」でない荒唐で軽薄な態度があって、おもしろ可笑しいこと、あるいは摩訶不思議なことが、この作品で追求されていた。そのため、少々眉唾な突飛な話であっても、読者は読み進めていくことができたが、『白鹿原』の方は、作者がかなり思い切った特殊な話や性描写を行っているにもかかわらず、重苦しい文体のためか、却ってスムーズに読み進むことができなかった。

こういう点に、『豊乳肥臀』の長所を私は見る。意義だの思想だのということからなるべく離脱して、「故事」に重点をかけることは、やはり新たな試みと言ってよかろう。敢えて比擬すれば、これは、性を謳歌した『金瓶梅』ではなく、摩訶不思議な「故事」を語る『西遊記』の世界を模しているのだといえよう。真面目に主旋律を謳歌せよという要請がいまだにある情況に対して、露悪的な書き方と不真面目な態度からする「故事」は、それなりの意義を持ち、新しさがあるのだ。

だがこの小説によって、男女の愛に感動することが少なかった。性と本能とは確かに描かれているかもしれない。かなり際どく、かなり多くの性描写があるといえるのだが、エロチックな感じさえ私はあまり感じなかった。実質的な主人公の上官魯氏の数多くの男との交わりにおいても、僅かに神父には愛のことばがあるものの、二人の愛と

して感動するには至らなかった。また、主人公上官金童の女性遍歴にしても、彼が学校を除籍されて国営農場へ行った際、そこの鶏飼育工場の片腕の三九歳の女場長に愛される。彼女との交わりに、私は唯一情愛を感じたのだが、それすら、「屍姦」という異常な事柄に作者は読者を引っ張っていってしまう。私には、莫言が事柄の重さをわざと軽薄に処理しているとしか思えなかった。彼女が死ぬ間際に、金童がやっと彼女を抱擁するのだが、その場面は二人の愛を語るに十分な交合であり、私には感動的であった。それを「屍姦」をしたかどうかの問題の方へ展開していくのは、いささか読者を軽侮しているのではないかと思う。

読者は怪奇な事柄であれば必ず食らいつくとばかりはいえまい。「故事」をこのように弄ぶなら、莫言の「不真面目な態度」なるものに危惧を感じざるを得ない。だからこそ、この小説には、男女の愛のエロスが描けていない。あるいは、描けなかったのだといえるのかもしれない。

これが、「偉大なる駄作」と私が評する理由である。

資料

1. 『豊乳肥臀』『大家』一九九五年第五期、第六期連載
2. 『豊乳肥臀』一九九六年一月　北京作家出版社　ただし、「とびら」には、一九九五・北京と印刷されている。
3. 莫言「『豊乳肥臀』解」（作家自述）『光明日報』一九九五年十一月二二日　第七版
4. 「九五長篇小説的長長短短」『文学報』一九九五年十二月二八日　第四版。張頤武の言（原載『北京青年報』十二月一二日）
5. 「首届〝大家・紅河文学奨〟」『大家』一九九六年第一期（一月一五日）

・①徐懐中、②汪曾祺、③謝冕、④李鋭、⑤蘇童、⑥王干、⑦劉震雲の評語と、⑧「評委会評語」
・⑨莫言「写出触摸人類霊魂的作品――在首届大家・紅河文学奨授奨儀式上的講話」

6．潘凱雄「実力派作家竟献長篇創作新因子――読一九九五年的部分長篇小説」『当代作家評論』一九九六年第一期（一月二五日）二二～三三頁
7．林為進「顕示出成熟的自信与亮麗――一九九五年的長篇小説」『当代作家評論』一九九六年第一期（一月二五日）三三～三八頁
8．李以建「莫言獲奨新作謳歌母親和沃土」『明報』月刊一九九六年三月号　九八頁
9．「書名何必怪誕」『光明日報』一九九六年三月八日　第七版。摘自『参考消息』一九九六年二月九日（原載新加坡『聯合晩報』一九九六年一月二九日）
10．朱晶「缺少批評」『光明日報』一九九六年四月一二日　第七版。摘自『長春日報』
11．莫言「『豊乳肥臀』解」『作品与争鳴』一九九六年七月号　七〇～七二頁（原載『光明日報』一九九五年十一月二二日）
12．薛兆強「莫言有話要説」『作品与争鳴』一九九六年七月号　七三・七六頁（原載『中国民航報』一九九六年四月一二日）
13．温克寒「喚起作家的良知――読〝『豊乳肥臀』解〟有感」『作品与争鳴』一九九六年七月号　七四～七六頁
14．彭荆風「視覚的癱瘓――評『豊乳肥臀』」『作品与争鳴』一九九六年七月号　七七、七八、八〇頁（原載『雲南当代文学』第三一期）

注

（1）この長編小説は、雲南人民出版社主辦の大型文学双月刊『大家』の一九九五年第五期（九月二五日出版）と第六期（十一月二五日出版）とに連載された（資料1）。そして、九六年一月、北京の作家出版社から単行本として出版された（資料2）。単行本の奥付によれば、字数四十三万字であり、六八五頁である。そして、「九五年四月一三日高密にて初稿、七月一七日北京にて二稿、九月一五日北京にて三稿」とある。

『大家』第五期には、第四章の終わりの部分までが掲載された。第六期は、第五章の直前の部分から第七章の終わりまでである。賈平凹が「主持」する「長篇小説」の部門、すなわち賈平凹の編集責任による掲載である。

なお、小説が始まる前に「編者按」（第五期の一二頁）があり、その中に、次のような文がある。

＊這部小説創作歴時両年。小説共分七章、包括補七另一章、分両期刊出、此書即将由作家出版社隆重推出。

引用文によれば、この小説が二年ほどの時間を費やして創作されたということと、「補七」という章を含めて、『大家』雑誌二期に分けて発表されること、そして、作家出版社からまもなく出版されることなどがわかる。ただし、ここに言う「補七」の章は、『大家』次号の第六期にも見当たらず、結局掲載されなかった。九六年一月の単行本には、「七補」という章が、「補1」から「補7」まで四〇頁分ある。したがって、字句の異同訂正等については未だ調べていないので、他に何か差異があるかもしれないが、今のところ、「編者按」に言う「補七」があるかどうかが、雑誌発表と単行本との違いということになるようだ。

(2) 莫言『紅高粱家族』八八年五月　解放軍文芸出版社　四五四頁

なお私は、この作品について「改革の動揺 中国映画、文芸の描くリアリズム」(『中国〝新時期文学〟論考』九五年九月　関西大学出版部　所収)で、触れたことがある。参照願いたい。

(3) 莫言は、『大家』雑誌社が、雲南の紅河巻煙廠(紅河タバコ工場)からの二〇万元をもとに設けられた「大家・紅河文学奨」(賞金一〇万元)を、九五年十月に北京人民大会堂にて得た。選考委員会委員長が徐懐中(一九二九〜)、副委員長が汪曾祺(一九二〇〜九七)、他に委員として謝冕(一九三二〜)、李鋭(一九五〇〜)、蘇童(一九六三〜)、王干(一九六〇〜)、劉震雲(一九五八〜)の五名がいる。謝冕と王干は評論家で他は作家である。彼らの評語は『大家』九六年第一期に掲載されている(資料5)。また、「評委会評語」にも次のような文がある。(資料5の⑧)

＊小説篇名在一些読者中可能会引起岐義、但并不影響小説本身的内涵。

この文は明らかに、読者のなかに題名について異論や非難があったことを意識している。

委員長徐懐中の評語を引用しておく。(資料5の①)

＊従黄河里舀起一碗水、不難看到碗底的泥沙。不過我們站在河辺、首先感到的是撲面而来的衝撃力和震撼力。『豊乳肥臀』是一道芸術想像的巨流、即或可以指出某些応予収斂之処、我仍然認為是長篇創作的一個重要収穫、五十万言一瀉而下、輝映出了北方大地近一個世紀的歴史風雲。苦難重重的戦争年代、写得尤為真切凝重、発人深思。書名似欠荘重、然作者刻意在追求一種喩意、因此在我看来不是不能接受的。

副委員長汪曾祺の評語は次の通りである。（資料5の②）

＊這是一部厳粛的、誠執的、具有象徴意義的作品、対中国的百年歴史具有很大的概括性。／這是莫言小説的突破、也是対中国当代文学的一次突破。／書名不等于作品、但是書名也無傷〝大雅〟。〝豊乳〟、〝肥臀〟、不応該引起驚愕。

薛兆強（資料12）によれば、賞金一〇万元はこれまでの文学賞のうちで最高額である。莫言は、税金などで七万元しか手に入らぬこと、及び、流行歌手などは一曲歌うだけでもっと大金を得ることなどを挙げ、大騒ぎする額ではないと言っている。

また、上述のような錚々たる選考委員の評価が、この作品そのものに対する異論を無言のうちに威圧したという面があるようだ。だから、たとえば温克寒（資料13）のように、小説そのものを読んでいないとわざわざ断って、莫言の「解釈文」（資料3、及び注(5)）に噛みつく文章もある。

(4)　たとえば、『文学報』九六年二月一五日　第四版　には、「長篇小説的岐途」という特集があり、郟宗培「長篇創作也須打仮除劣」、曹維勁「走向市場須把握好〝度〟」、程徳培「性謊言備忘録」、許紀霖「仮作真時真亦仮」、米舒「〝純文学〟幌子的背后」の五編が掲載されている。さらに二つのコラムがあって、そこには写真が載っている。一つは、本の出店の周囲に林立する宣伝文の写真二枚で、「目に触れるものみな心を驚かせる」と説明してある。またもう一つには、八冊の本の表紙の写真があり、それらの内容が大同小異で、ほとんど性描写であることが指摘されている。『裸魂』『媚蝶』『野恋』などといった長編小説の表紙が見える。

また米舒「〝純文学〟幌子的背后」という文章の題名からもわかるように、作家や出版社が〝純文学〟を売り物にして、乱れた性を書くことに反発している。その題の上には「お金のためにこのような〝小説〟をでっち上げた作者たちに、真先に考えてもらいたい。貴方の書いたものが貴方の子供にどんな影響を与えるかということを」という要約がついている。

(5)　莫言「『豊乳肥臀』解」（作家自述）『光明日報』九五年十一月二二日　第七版。（資料3）

この文章で彼は次のように言う。

＊『豊乳肥臀』是我耗費数年精力写成的一部五十余万字的長篇、『大家』今年第五期刊載了前半部分、単行本已由作家出版社出版。全書尚未印行之際、就有熱心的同志発表文章、対書名提出了質疑和批評。為了消除誤会、我不得不解釈一番、尽管我相信読者読完書后、会做出公正的評価、也許会有読者甚至会同意我的命題、但我還是不得不解釈一番、起碼或可以剖明一下我并無借

此〝艶名〟嘩衆取寵的意思、当然也許説了也是白説、但拠説白説也得説、況且不説白不説、姑且随便説説吧。

ここから、莫言が「数年」の精力を費やして「五十余万字」の長編小説を書き上げたことがわかる。先の注(1)に触れた「編者按」の「二年ほど」と違って、実際には八三日間で書き上げたそうだが、ここでは十数年前、解放軍芸術学院文学系で勉強していたときから構想のきっかけがあったという。美術の時間に孫教授が「これは母系社会時期の作品で、生殖崇拝であり、勿論母性崇拝の物象化表現である。当然ながら偉大な芸術品でもあり、全ての彫塑の源である」と解説した、古代の彫像のスライド（大きな二つの乳房と大きな腹部と臀部のある石の彫像）に感動したことが、それであるという。

この文章では、以下、合計大きく三つの点について、莫言は「解釈」を書く。ここではその「解釈」についてこれ以上触れないが、三点を簡単に要約すれば、彼が歌いあげたのは、第一に人類の生育繁殖の根本であり、第二に天下の母親の苦難、第三に大地の品格であると言う。

さて、ここで触れられている「熱心な同志の書名に対する質疑と批判の文章」なるものを私は見たいが、未見である。また、上に引いた文章に続く第二点の「解釈」文中には、「此の書名の問題は、〝でか尻〟にあり、私が見た数篇の批判文の鋭い切っ先も〝でか尻〟を標的にしていた」とあるのだが、その数篇の批判文も未見である。

もっとも、莫言のこの解釈文に対しては、自分の小説を売り出すためにわざとおこなった宣伝文にすぎないとみなす意見もある。たとえば、温克寒（資料13）などがそうである。

(6) 朱晶「缺少批評」（摘自『長春日報』）『文芸報』九六年四月一二日　第七版。（資料10）

引用は、直訳ではなく、適宜取捨選択と意訳とを施したものであることをお断りしておく。

(7) 同注(6)

(8) 同注(3)

(9) 同注(6)

(10) 同注(6)

(11) 同注(6)

(12)　たとえば、『文芸報』九六年二月一六日の第一面には、陸天明（一九四三〜）の長編小説を称揚する「努力創作弘揚主旋律的優秀作品　長篇小説『蒼天在上』研討会在京挙行」とか、「時代召喚弘揚正気針砭時弊的雑文――本刊召開雑文創作座談会」などの記事がある。なお、陸天明の小説については吉田富夫氏の言及があるので、それを参照されたい（『中国総覧　一九九六年版』四〇五頁、財団法人霞山会　九六年九月）。

(13)　同注(6)

(14)　当然のことながら、「大変魅力的な人物」と評価するのは私の感想であって、この人物が「反革命」で「地主還郷団」の一員であり、それを美化する莫言の描き方を批判する彭荆風のような文章もある（資料14）。しかし、逆説的に言えば、彭荆風が苛立って取り上げ、批判文を書かねばならぬほど、司馬庫の形象は活き活きしているのである。

(15)　彭荆風は、この小説が反共産党的であることを指摘している（資料14）。

(16)　莫言「写出触摸人類霊魂的作品――在首届大家・紅河文学奨授奨儀式上的講話」（『大家』九六年第一期（一月一五日）（資料5の⑨）

(17)　陳忠実『白鹿原』九三年六月　人民文学出版社　六八二頁

この小説の主人公が七人も妻を娶ったことや、その性描写や狐憑き、また、陝西省の一地域の百年近い歴史を扱うこと等、『豊乳肥臀』と表面上類似する点がかなりある。

（追記・資料収集にあたり、辻田正雄・佛教大学助教授と福島俊子女史のお世話になった。記して感謝の意を表する。）

二　莫言のベール

二〇〇三年の九月二一日の日曜日、莫言氏（以下、敬称は略す）は京都の佛教大学四条センターで講演をした。京都の現代中国研究会と、関西日中関係学会の主催、大阪府日中経済交流協会と神戸社会人大学の後援で、二時から四時半まで行なわれた。莫言はほぼ一時間ほどの講演をし、一五〇名余りの聴衆に感銘を与えた。

その様子は、『天涼』第五巻一六二頁にM&H氏のレポート「講演会『莫言の文学』に出席して」が発表されているので、それを是非見ていただきたい。そこのO先生が言っているように、この講演の目玉は、莫言が「物を書くこと、それは私が時間に対抗する手段なのです」と明言したことであろう。私は莫言の小説における「時間」はかなり意味が深いと思っている。

この講演会は、莫言の長編小説『檀香刑』（日本語訳名『白檀の刑』中央公論社、二〇〇三年七月）の翻訳出版記念をも兼ねていて、著者によるサイン会も行なわれた。翻訳者である吉田富夫・佛教大学教授も莫言の文学について「莫言の故郷とその文学」と題して紹介・解説をし、竹内実・京大名誉教授も、中国に対する見方に示唆的な話「中国庶民のしたたかさ」を述べた。

進行役を萩野が受け持ち、毛丹青氏が通訳をした。その時の原稿が、『東方』二〇〇四年一月号に掲載されてい

る「この四年のわたし」である。

この講演で触れられている『牛』という作品については、もしかすると、また翻訳本が出るかもしれないので、ここでは述べない。

莫言は、「文革」中に牛飼いをしていた。そのころの寡黙で孤独な生活が自分の作品の根底にあることをこの講演でも述べている。牛の話といえば、史鉄生の『遙かなる我が清平湾』が思い出される。これも作者が「文革」中下放していた時の話であった。ついでに言えば、牛が現状を批判して、ものをしゃべったのは、賈平凹の長編『廃都』であった。牛は馬や豚に比べてずっと思弁的で哲学的なのかもしれない。

小説『白檀の刑』については簡単に触れておこう。

清末、山東省においてドイツ兵の横暴さに憤慨して兵士を殺した「猫腔」劇団のボス・孫丙と、中国とドイツの面子のために孫丙の処刑を執り行う高密県知事・銭丁と、白檀で作った槍のような刑具で五日間ほど苦しめて死刑にする死刑執行人・趙甲、この三人が主人公である。そこに、孫丙の娘で、趙甲の息子の嫁である眉娘が、知事・銭丁の愛人として絡む話となる。

こういう入り組んだ関係から、莫言は一つの共同体を作り出す。それは善悪だとか正邪だとか、敵味方さえ超えた、一つの時代に生きる、逃れられない共同の記憶を持つ集団なのだ。村や部落全体が持つ記憶が伝統であり、文化だと言っているような気がする。

清末のことであるから、西太后や袁世凱などが出てくる。袁世凱がかなり評価の高い人物として出てくるのが、意外であり、初めてのことではないかと思う。

眉娘は奔放な極めて魅力的な女性として活躍し、この小説の彩を添えるが、私が莫言にモデルを尋ねたところ、

いろいろな女性の総合であって、決して一人の女性がいるわけではないとの答えであった。

「猫腔」という曲は、莫言の独創であることを彼自身が語っているが、モトとなった地方劇団があるという。どうやら「茂腔」というものらしい。私の想像では、発音の似ていることから「猫腔」となったらしく、本当のところ、莫言は猫が大嫌いのようである。これは今回の莫言の日本滞在をコーディネートし、通訳もして全日程の行動を共にした、毛丹青の証言である。

私は会場で「猫腔」とはどのような歌であるのか、莫言に聞かせて欲しいと申し出てみたが、当然の如く、会場では無理であった。やはりお酒が入って、気分が乗らなければできることではない。幸い私は、翌日機会に恵まれ、莫言が唄う「猫腔」を聞くことができた。歌は愉快に気分に乗って大勢が囃してこそ真価を発揮できる。その日は、唄っている莫言自身が笑い転げたのであるから、その真価を発揮したもののように感じたが、いかんせん、私は歌ができない。唄えない。どうやら囃し方に特徴があるようであった。

銭丁という県知事が登場するところはなかなか格好良い。美男で腕が立って、切れる。となれば、美人でボリュームのある眉娘がお相手となるのも自然の成り行きである。だが、時代は、山東の片隅の一つの県で事を処理するわけにはいかなくなっている。中央という上からの締め付けが厳しくなり、あたかも中間管理職のように、銭丁は現場と上部との板ばさみとなって苦しむことになる。ドイツ兵殺害の下手人・孫丙の行為は、外敵に対する反感・反抗という民の声を代表する面があり、しかも、眉娘という愛人の父親である。しかし、上からの命令は、死刑にすることであり、しかも見せしめとして、一気に殺さず、ドイツが山東の鉄道敷設を完成させる日まで、生かしておくようにすることであった。

白檀で作った研ぎ澄まされた棒を肛門から突き刺して、なかなか殺さずに苦しまして死刑にするという刑罰が白

檀の刑だ。これはなかなかどぎつい。

趙甲という人物の形象にはどぎつさがあり、彼が行なうのは正当な、公認された人殺しである。長年、死刑執行人として存在したというそのことだけで、特異である。死刑執行という必要悪そのものについて、この小説は問いかけている。人類における死刑の持つ意味という大げさな意味ももちろんある。また、死刑という思想と、それの実行という側面の現実的異相とを問いかけてもいるような気がする。死刑執行はしたがって一つの技術、さらには芸術にまで高まる。趙甲にあるのはこういう側面のプライドである。それが妖気を発する。人の血を吸うという陰気で生臭い消しようのない妖気である。この「暗黒と残虐」は個人を超えて人類の歴史へと飛翔する。

このように、目につくのは、題材の奇抜さと描写のどぎつさだ。

もう少し、莫言の他の作品、『至福のとき』（平凡社、二〇〇二年九月）に収められている中編小説「飛蝗」を例にとって莫言のどぎつさを見てみよう。

この小説「飛蝗」は莫言得意の故郷・高蜜県東北郷が舞台であり、五〇年ほど前の話をモトにしている。イナゴが大発生して大被害を起こす。これだけでも異常でどぎついものである。

主人公は北京で、イナゴ大発生の新聞記事を読んで、故郷に帰る。自分が子供であった時の記憶とコーリャン畑とが主人公の思い出す摩訶不思議な話をリアルに支えている。時間と場所を、田舎にし、現代から移動させたことによって一つのベールが出来てきて、それがここで話されること（故事）をすべて真実と思わせる。

例えば、主人公の「私」が子供のとき、石を投げてアヒルをぶっ殺した。そのアヒルを祖母さん（九老媽）が沼から救い上げようとしてヘドロの底に足をとられ、沼に沈む。祖父さん（九老爺）にそのことを告げると、祖父さんは酒を飲んでいて、なかなか助けようとしない。やっと腰を上げて、二本歯のフォークで助けようとする。祖母

さんの方は腹までヘドロに漬かり、化け物じみた叫びを上げ、掻き立てられたヘドロの臭気で息も出来ない。祖母さんは祖父さんを「遅すぎる」と罵る。罵られて怒って帰ろうとする祖父さんに慌てて祖母さんは謝る。すると祖父さんは、鋭いフォークを祖母さんに突き出す。祖母さんは突き刺されまいと半分ヘドロに埋まりながら、懸命に身体を避ける。こんなことを繰り返して、祖母さんはぐったりする。祖父さんはザマみやがれと罵り、祖母さんは青い光を目から放つ。

やっと祖母さんを引き上げると、莫言はこう書いている。

「九老媽はかじかんだヘビみたいで可愛げがなく、嚙む力を回復するやいなや、九老爺の腕にがぶりと嚙みついた。九老爺が力をこめてもぎ離すと、九老媽の口にたっぷり肉が残った。」

ここの描写には、ヘドロの臭いと二人の老人のすさまじい憎悪の葛藤があって、真夏の真っ昼間の田舎の沼が目に浮かぶようだ。

このように莫言の小説には、『赤い高粱』（徳間書店、一九八九年九月と一九九〇年十月）にもあった、犬が人間の死骸をあさる場面のような、どぎつい原色の描写がなされているといってもよい。

だが私の心を打ったのは、実は現実では考えられない夫婦のこの憎悪に見られる真実である。まさにここに夫婦という関係性が見事にとらえられているような気がしたからだ。夫婦とは何か？　愛なんてものが頼りにならないことは今や当然である。むしろ、ここに見られるような憎しみこそ真実であるような気がする。憎しみでもまだ言い足りない。愛憎というべきかも知れない。切っても切れない関係、空気のように水のように逃れられない関係、すなわち自ら選んだ宿命であるかのような生活そのものなのであろうと思われる。どんなに憎み恨もうとも離れられないものなのだろう。だから互いに思いっきり悪態をつき、悪さをし、嚙み付きまでする。これこそが愛である

ともいえる。こんなに赤裸々に自らを曝け出せる関係が夫婦というものなのであるに違いない。

この関係性は、莫言の他の小説にあるような、舞台が都市になり、教授が若い女と仲良くなり、奥さんの前でへどもどする浅薄さとはあまりにも違う。都市には都市の生活から来る晦渋さがあるが、それよりも、やはり莫言はふるさとの伝統に基づく描写の方が生きているような気がする。

小説に出てくる祖父さんもちゃっかり別の若い女と浮気をしている。その女が離縁されて、村を出て行く時の凛々しい美しさと良い匂いは、まさに本当にそうであったであろうと思えるようなリアリティに富んでいるが、それはそうあって欲しいと願う主人公の「私」と読者との夢が合致したものに他ならない。先に述べた一つのベール（時空のベール）がそれを許したのであると思える。

『白い犬とブランコ』（NHK出版、二〇〇三年十月）には、そういう莫言のベールの拠って成り立つ原点が描かれ、「時間とは辛抱であり、辛抱とはある種の人格的エネルギーである。久しい試練を経てきたわれわれは、いささか神経が麻痺していたゆえに、時間は麻痺の触媒であり、麻痺は時間の結晶であった」と書いている。

莫言と今回起居を共にした毛丹青が驚いて書いているところによると（『中国新聞』二〇〇三年十月三日）、莫言は朝起きるといつも決まって、毛丹青に真顔でこう聞いたそうだ。「わたしは眠っていたかい？」と。

莫言は、いつも夢うつつなのであろう。やはり、自分のベールに引き込んだ時に、彼の語り口はおもしろいし、そこに展開される故事がやはりおもしろいと思った。

莫言の持つ力というものは、どぎつさにある。中編『飛蝗』も、イナゴの大量発生による凄まじい被害の描写がある。『赤い高粱』でも、人肉を食う犬の描写などがある。『白檀の刑』でも、刑罰の残酷さなどがある。こういうどぎつさが、彼の小説の魅力となっているが、そこには今私が述べたような普通のリアリズムの描写を超えた、こ

との真実を透徹して見透かす眼があると思われる。ことの表層を超えたラジカルな眼、それが我々をひきつけるのだと思う。だから今、莫言が現代的で、注目されるのだと思うのだが、それが夢うつつの状態から醸し出されることも、またひとつの魅力だとも感じた。

三　莫言の『四十一炮』

題名の『四十一炮』の「炮」とは、「ほら吹き」ということであるから、多くが口からの出まかせである。出まかせに語られるのは、改革開放の波が押し寄せる現代中国の農民の子・肉小僧の生き方である。

肉小僧の村は、「落とし村」といって、全村で牛・豚・羊・ラクダ・犬などの屠殺を生業としている。都会の者の贅沢が肉の消費に拍車をかけた。他の村より多く売るために、肉に水を注入して、鮮度を誤魔化す。村長・老蘭からして率先して行ない、村の者を豊かにする。村長の権威はこうして保たれる。肉を美味そうに見せるためならば、ホルマリンさえ混ぜる。私的な個人的稼ぎだけでは発展性がないと見た老蘭は、村営の食肉加工工場を作る。農民はこの有限会社の社員となる。もう農作業など出来はしない。これが現代中国の農村の実情だ。

肉小僧の「お父（とう）」が東北から戻り、老蘭が建てた工場の長になる。だが、お父の考えは時代に合わず、息子の羅小通すなわち肉小僧が職場主任として働く。肉小僧は学校を出ていないが、廃品回収で培った生活の知恵で、肉に注水するのではなく、生きている家畜に水を注入する方法を考えつき、工場の売り上げを伸ばす。

肉小僧は何よりも肉を食うことが好きだ。彼は、肉の声さえ聞き取れる。だから、子どもの職場主任に反抗する大人三人との、肉の大食いコンテストで圧勝する。

肉小僧は思う、「諺にも言うじゃないか。『一つ取り柄で世を渡る』と。自分の道を行けばいいんじゃ」「この世にはじつはたった一つの問題しかありはしない。つまり肉の問題だ」と。

これは、教養知識偏重のこれまでの価値観の行き詰まりを見事に突いたおふざけである。さらに、読者は考えさせられる。おふざけの肉喰い競争でも勝たねばならぬ。大勢の前で勝ってこそ権威が生じるのだ、と。このふざけの中にある真実が、この小説の命である。

そう見れば、このほら吹きを通じて、我々の頭の中にある、中国の遅れた農村という既成概念が、ぶっ飛ばされることだろう。訳者のこなれた語り口に乗って、作者・莫言のほら話に付き合ってみれば、哄笑のうちに二一世紀の中国の農村の実態も見えてくるのではないだろうか。

（吉田富夫訳、中央公論新社、二〇〇六年三月）

四　小説の難しさ

莫言の長編小説『生死疲労』は、二〇〇六年一月に出されたが、二〇〇八年二月一〇日に吉田富夫氏の訳によって『転生夢現』上下冊として出版された（中央公論新社）。この難解な莫言の四十九万字の文章は、ほぼ一・七倍の長さとなって二年間の労力によって訳出されたのである。

難解さの内実は、彼の文章の難しさもあるが、話の奇想天外な展開にもある。

この小説には、前作の『四十一炮』に見られた転生が使われている。今度は顕著に前面に転生を押し出し、人間からロバ、牛、ブタ、犬、サル、そして人間へと六度の転生を描いている。六道輪廻というわけであろう。

話されるのは、つまりお話の対象は、西門鬧（シーメン・ナオ）という村長（地主）なのであるが、莫言はお話として、西門鬧その人ではなく、西門鬧の魂を取り上げたのだ。開明的な良き村長として村の生産を上げてきたにもかかわらず、革命の波は彼を地主として処刑した。その恨みが地獄の閻魔殿から生き返り、ロバに転生したのである。だから、まず話をするのは西門鬧その人ではなく、ロバなのである。こういう工夫がわかると、この小説が面白くなる。

中華人民共和国が成立したのは、毛沢東が北京の天安門上で、「中華人民共和国成立了！」と宣言したとき、つ

まり「国慶節」からである。でもこれは歴史だ。この小説は、一九五〇年一月一日から始まる。ここにもう、歴史とは違うお話の世界が始まるのだ。

一九五〇年から始まる農業共同化の時代は、互助組、合作社、そして人民公社へと進んでゆく。共同化するのは当時の貧困な生産力を人的能力の集合で乗り切ろうとした側面もあった。しかし、そこには人を均質的な能力とみなさねばならない無理があった。能力のある者は、能力のない者や不誠実な者との共同作業には耐えがたかったのである。小説はロバの目から、個人農業経営者と共同化を進める革命的な指導部と村人との対比を描き出す。共同化の問題を一人の人物に語らせたり、焦点を絞って一人の描写にすることはすでに行なわれている。莫言はそうせず、気持ちの上ではロバに転生した西門鬧の魂に寄せながら、現実を見ているロバからの目で話を進めるのである。ここに莫言の独創があり、面白さがある。すなわち、ロバなり牛なりの異類からの目が、物事の客観性を保証したといえるからである。

人民公社から文化大革命への時の移り変わりとともに、革命指導部の中でも老革命家から新たな知識と才覚を備えた子供の世代へと代わりゆき、ロバは死に、西門鬧の魂は牛に転生する。文化大革命が始まっても、個人で農業経営をやりぬいた男がいて、牛はその男のために死に、今度はブタに転生した。西門鬧の息子によって、一大養豚場が開かれたり、果ては文革後、ゴルフ場や歓楽街が設立されようとする。ブタも犬、そしてサルに転生してゆく。

時代の変化と転生のたびに書きこまれるのは、徐々に薄れていく父子の感情であるが、時として対立する父子の真摯な感情がこの奇想天外な物語のリアリティを支えている。

この小説が舞台としたのは、莫言の故郷・山東省東北の高密県の一農村である。広大な中国の一部の地方に過ぎないが、動物の転生という新たな工夫は物語を客観的に描写するに力があって、文革後の改革開放の時期にも変わ

らない貪欲な人間の色と欲をまざまざと描き出している。そういう意味で、われわれには不可解と思える中国（中国人）がこの小説によって、同じ人間の目線で伝えられたといえるのである。

「西門牛よ、聞いてくれ。おれは話さねばならない。なぜなら、それは起こったことであり、起こったことはすなわち歴史、歴史を再述して細部を忘れはてた当事者に聞かせるのはおれの務めだからだ」とある。すなわち、この小説から現代の中国が解明されると言えるが、こういう解明は外国人にとっては大変有意義で面白いけれど、果たして中国の人にとっては如何なものであろうかと思う。外国人としての私にとっては、見事に中国の歴史を解明してくれて、中国理解に役立つのであるが、私の意地悪な観点からすれば、中国の人ならば、何も小説で中国を解明してほしいわけではないであろう。いったい中国に莫言の読者はどれだけいるであろうかと思うのである。

西門鬧という名前から、『金瓶梅』の主人公西門慶を思い出す。章回体小説の形式を取っているから、莫言は何らかの伝統的なつながりを持たせているのかもしれない。もしそうであるなら、あの騒がしい世間を突き抜けていった強くて活動的な男のイメージがここにはあるのであろう。いずれにせよ地主を、そして、個人農業経営者を話の中心にすえるということは大胆なことである。地主や個人農業経営者の顕彰は、中国共産党の相対的低下を招くものであろう。少なくとも、党の否定とまでいかなくとも積極的な賛意を呼ぶものではない。異類のロバなどに転生することはその免罪となるのかもしれない。

また、作品の中に「莫言」自身がたびたび出てきて、彼を嘲笑したり、彼が卑下したりしている。こういう側面は、かなり小説としての面白さを意識した工夫であろうが、作者が思っているほど読者は面白いとは思わぬものだ。また、独特の「汚いことば」も世界の読者から受け入れられるとは限らないであろう。たとえば、今までのフランス語訳では、「汚いことば」として、即物的な「屁眼子」だの「屎」や「卵子」ということばは削除され、訳出さ

れていないそうだ。今度の小説の中でも、「那頂偽軍帽、褪色起皺、恰似一頭閹牛的卵嚢」などとあるが、これはいかにも農村出身の莫言らしい比喩ではある。しかし、フランス語や英語に訳出されるかどうか危なっかしい。訳されないとすれば、彼の魅力も半減しよう。彼の小説の魅力は、率直な感情の表出にあり、その際「汚いことば」が多用されたから、逆説的にいえば、「汚いことば」こそ彼の小説の生命なのである。

作家として自分の国を総括したり、自国を代表する人間を典型として形象しようとするのは、当然の欲求であると思う。魯迅の『阿Q正伝』がそうであったように、阿Qの形象が中国人をよく象徴していた。莫言もそういう作品として、この『生死疲労』(日本語訳名『転生夢現』)を描いたのであろう。それは一応成功しているように思う。

莫言は本の中扉でこう言う、「佛説　生死疲労、従貪欲起。少欲無為、身心自在。」と。人間の色と欲の不変を確実に描きだしたが、小説自体の面白さはどうであったろうか。

小説は難しい。

五　葉広芩の『貴門胤裔』

作者の葉さんが京都に来たのは、一九九九年の一月末のことであった。その講演を聞いた人はみな、彼女の気品に圧倒された。彼女はいう、西太后に似ているから映画に出てくれと言われたことがありますが、お断わりしました、と。

作者は、西太后と縁続きである。だから、この小説にも、そういう内幕的な話がありそうだが、そう期待すると、彼女の気品に読者はしっぺ返しをされる。

この小説に描かれる世界は、なるほど清朝貴族（貴門）の子孫男女七人ずつ（胤裔）の生きざまである。十四番めの末っ子の娘を語り手として、国民党の高級役人から台湾へ行った長男、京劇の素人俳優の長女、文革で醜く争った二男三男四男、乞食をやって勘当された五男や駆け落ちした五女などが、全九章のそれぞれの主人公になっている。

彼ら貴門胤裔たちの人生が、貴門のしきたりや、京劇などの芸事や、風水の奥義や、陶磁器などの技術の知見などによって展開される。中国の伝統文化の魅力が解き明かされるおもしろさも、この小説にはある。

だが、たとえば京劇に入れあげてしまう長女の悲しい人生にしても、芸事の魔性に生命を吸い取られてしまう不

可思議は、中国だけでなく、日本にも世界にも、京都にもある話ではないか。

だから、葉さんの描く世界は、一見、別世界のおどろおどろしさがあるようでいて、描かれたのは、身近な人物の生真面目で誠実な、愛と生の燃焼だと言ってもよいのだ。

生命は時間によって燃焼するから、清朝滅亡から始まって、中国国民党と共産党の争い、文化大革命、改革開放の現在へと続く政治社会の変動が背後から湧き上がってくる。この葉さんの中国現代史は、何かを排除して生きる生命の力強さと、排除されざるをえなかったものへの哀切、換言すれば、生命のもつ必然的な悲しみによって描かれた。この視点が葉さんの気品と言える。時代に生きた個人の生命力と滅び行くものへの挽歌が歌われているのである。

こういう意味で、この小説は、訳者吉田富夫氏の解説にあるように、中国文学の新たな地平を切り開く小説と言えよう。

（吉田富夫訳、中央公論新社、一九九九年九月）

六　高行健の『母』

飯塚容氏の訳した『母』という短編集には、高行健の八篇の作品が収集されている。

高行健（一九四〇～）、そう、あの中国人で初めてノーベル文学賞を取った男だ。彼の文学作品がどんなものであるか、この『母』という短編集は、手ごろにわかりやすく紹介する本となっている。そういう意味で、お勧めの本だ。

収録されている八篇とは、「母」「円恩寺」「公園にて」「痙攣」「交通事故」「おじいさんに買った釣り竿」「瞬間」「花豆――結ばれなかった女（ひと）へ」であり、訳者飯塚氏の「解説」がついているので、作品の意義もよくわかる。

底本としたのは、台湾の聯合文学出版社『給我老爺買魚竿』で、二〇〇一年の増訂本であるそうだが、私に言わせれば、これは、長年高行健について研究してきた飯塚氏自身が選んだ「高行健短篇集」といってもよいのだ。それほど、この短編集には、飯塚氏の愛着がこめられている。

それは飯塚氏の「解説」に述べられているように、選択された作品のうち、「母」と「花豆」の二篇を特別に付け加えたことに表れている。

その「母」という作品は、二十年前に母親を失った息子の回想である。長男である〝ぼく〟の率直な心情吐露が、私には異常な感じで眼に飛び込んできた。

〝ぼくを残していったとき、あなたはいまのぼくより若かった。あなたは一九六一年に世を去りました。ぼくはあなたがいくつで世を去ったのかも覚えていません。僕は親不孝な息子です！　ぼくを許してくれますか？…〟（九頁）と、畳み掛ける告白は誠実で心を打つ。

この作品が一九八三年『十月』第四期（原題は「母親」）に発表されたことに驚きを隠せない。個人的な思いと感情とが何の憚ることなく披瀝されているからである。個人的な体験を基にした思いと感情は、当然のように個をとりまく状況への不満と告発になる。これが時代である。そして、だからこそそういう書き方は抑制されるべき対象ともなった。それは「精神汚染反対」のキャンペーンとなって、高行健の創作活動を制限するものとなったのである。

この「母」という小説では、母親が出身問題で労働改造の農場に追いやられながら、なおも息子のことを思い、心身を犠牲にして成し遂げた好意の一つ一つを、今、当の息子がやっと理解するという構造である。この構造事態は、何ら新しいものではないが、母親の好意を知らないがために逆恨みしたり、或いは知っていても若気の至りで却って反発の態度を取るなどということは、誰しもあることであるから、そういう意味でも哀切な感じをもたらす。まして逆境にある母親の命を賭しての好意であれば、なおさら涙を誘うものとなる。一言で「文革」という状況は、こういう屈折した関係を多くの家庭に強制的に残した。そして人々は無告の民として過ごさねばならなかった。だから、〝ぼく〟の告白は、そういう無告の民の代表ともなっているのである。

ただ、この「母」という作品では、文革ではなく、それ以前の年に母親は亡くなっている。また、実を言うと母

親は、党の呼びかけに応えて自ら進んで農場に行ったのであった。これもまた、無告の民の悲しいサガかもしれない。そういう党と人民との関係は、のちの高行健の長編小説『ある男の聖書』（飯塚容訳、集英社、二〇〇一年十一月）の一つのテーマともなっていると言ってもよいだろう。

それはそれとして、この「母」という作品は不思議なリアリティをもって、今も我々に訴えかける。そのリアリティは、題材としての真実性だけでなく、多分に、〝ぼく〟〝彼〟そして〝おまえ〟と人称を変化させて使用しているところに起因するだろう。つまり作者の語りのありようが、事柄としての母親の労働改造と、文革へ集約されていく息子世代の高揚とがすれ違うという内容を浮き立たせるのであるが、それが〝ぼく〟と、〝あなた〟なり〝お母さん〟という直接的な二者の関係だけで成立されてはいない。二者の関係だけでは、どこかしら影を落とす曖昧な欺瞞性が生ずるのであるが、対象となる主人公を〝彼〟として客体化してみたところに、まず二者の補完性が薄れ、客観性が存在するように思える。こういう工夫は、フランス文学に精通していて『現代小説技巧初探』（一九八一年）を出したことのある作者ならではの特色の一つであろう。

だが、私にはそれ以上に、〝彼〟だけでなく、〝おまえ〟として自分で自己を剔抉する言い方も使用したところに、この作品の臨場感が生まれ、事柄のリアリティを強めたような気がした。

〝学部事務室の人がやってきて、彼に言いました。「いつ、家に帰るんだ？」「もう切符は予約してありますから、休みになったらすぐ帰ります」おまえはまったく予期していなかった。家から電報が届いていたが、先生はそれをおまえに渡さなかった。ただ早く帰るように暗示を与えただけだった。おまえは、その言外の意味を理解できず、詳しく尋ねようともしなかった。おまえは、まったく迂闊だった。〟（一一頁）

もちろん、原文は〝你〟である。それを〝おまえ〟と訳したのは、飯塚氏である。高行健の作品の〝你〟を、

〝きみ〟でもなく、〝あなた〟でもなく、譴責するような〝おまえ〟と訳したところに、飯塚氏の高行健の作品の理解の的確さを私は感じた。

高行健の作品は言ってみれば、〝おまえ〟の文学である。読者は、この言葉によって喚起される、主人公と同列の世界に立たされ、しかも負を背負った、取り返しの効かぬ記憶と意識の世界にいざなわれる。こういう時空こそ、高行健の文学世界だと私は思うが、このことは、高行健の長編小説『霊山』（飯塚容訳、集英社、二〇〇三年十月）に一層顕著である。が、今はこの一九八三年の「母」という短編にすでに芽が出ていたことに驚愕しておけば足りるであろう。

飯塚氏が好んだ「花豆」という小説は、一九八四年九月号の『人民文学』に載った作品である。五十歳の誕生日を迎える〝ぼく〟が幼馴染で恋人であった〝花豆〟への思いを一人雨の日に思い描く。〝ぼく〟は医者から、高血圧症だという診断を受け、安静療養を言い渡されたのであった。したがって、ここには、〝きみ〟への思いを通して自分の過ぎ越し生き方が回想されることになる。時間というものの移ろい易さと、男と女の理解しあえない関係とが独り語りされる。とりわけ高行健は、男女の理解がずれることを、つまり永遠に男女は理解しあえないことをテーマとしているが如くである。男女が理解しあえないことを明確に意識するのは、実は青春の時ではなく、中年から老年になった時なのであろう。若い時は、相手の心がわからないので、勇気が出ない。人と人との関係に必要なのは相手への配慮ではなく、勇気なのである。

〝土曜日の夕食後、彼はきみの宿舎を訪れた。ほかのクラスメートたちは実家に帰ったり、外出したりで、きみたちは二人きりになった。彼はしきりに懇願した。夜中の十二時すぎに、きみは彼を追い返した。しかし翌朝七時、

彼はまた、きみの部屋のドアをノックした。まる一日居すわって、自分の身の上、孤独な心、きみへの愛情を語った。彼は孤児で、身寄りがない。母方の叔母が香港にいるだけだった。きみがプロポーズに応じてくれるなら、どんな困難の待つ場所へでも一緒に行くと言った。さらに彼は、結婚後は決してつらい思いをさせないと誓い、きみのベッドの前にひざまずいた。きみが要求したわけでもないのに、彼はひざまずいたのだ。月曜日の朝になって、きみはようやく涙ながらにプロポーズを受け入れた。それは愛情ではなく、憐れみだった、ときみは言った。きみの夫は確かにきみを愛していた。きみも彼に尽くした。でもきみは、ぼくたちの幼年時代を忘れることができなかった。もう一度ぼくに会いたかっただけで、それ以外には何もない。今度は二度と里帰りすることもないだろう。きみは泣きながら、そう言った。〟（一六四頁）

長い引用になったが、ここに描かれているのは、〝ぼく〟の思い人である〝花豆〟が、〝ぼく〟と結婚することにならず、〝彼〟と結婚することになったいきさつである。結婚と愛情とが必ずしも一致しないのが普通の人生である。ただ、ここで注目しておいてよいことは、高行健には強い思いがあることであろう。幼年時代の生活がどんなに悲惨で窮屈であろうとも、そこに存在した子供達にとってはかけがえのない交流と生活があったのである。その生命の燃焼を高行健はいとおしむ。さらに、その時の稚拙な交流に対する苦味が重なる。この思いが高行健の一つの抒情を醸し出しているのであろう。

〝それは愛情ではなく、憐れみだった〟というのは、しかし、年を経た後年の判断であろう。愛情にせよ同情にせよ憐憫にせよ、そんなに判然と区切ることが出来るものではないのだ。そのような判定はその後のさかしらな生活の知恵がもたらしたものであろう。女性にも男性にもある、こういう年を経た後の智恵と、智恵に対する情念の不満とを高行健は、その後の長編で追い求めていくような気がする。そういう兆しが見えるのは、この「花豆」だ

けではなく、「瞬間」という作品に一層顕著である。この亡命作家達が集まって作った雑誌『今天』に掲載された作品「瞬間」には、一筋縄ではとらえられない女性に対する認識が濃厚に出ている。この点が、高行健の作品の八〇年代と九〇年代以後の違いであるような気がする。

ところで、ここの引用した、〝彼〟の求婚の部分は、『人民文学』では殆ど削除されている。最初の〝土曜日の夕食後、〟から、〝彼はひざまずいたのだ。〟までの部分がないのである。飯塚氏も指摘しているが、「花豆」という作品における『人民文学』編集者の改変は、かなり多い。総じて、元気の良い方向へ手直しがなされている。

この八篇の作品の中で、私がわりと気に入ったのは「公園にて」であった。飯塚氏に拠れば、〝ほとんど会話のみの作品。高行健が劇作家として多くの仕事を完成させる予兆がうかがえる。〟（二一一頁）ということである。確かにその通りなのであるが、一言付け加えたい。

二人の、別れたかっての恋人が公園で再会する。たまたまやって来た若い娘がどうやら恋人を待っているようなのであるがついにその男は現れず、娘はすすり泣きをし出す。二人の会話は、二人の過去の交流を再現するものであるが、中にこんな会話もある。

あの娘（こ）は顔を覆ってすわった。手で顔を覆っているように見えたが、斜面も並木も薄暗くて、はっきりしなかった。鳥のさえずりが聞こえる。

「鳥もいるのか？」

「森じゃなくても、鳥ぐらいいるわ」

「スズメもいる」
「あなたは傲慢になったわね」（五一頁）

こういう会話の飛躍に私はハッとさせられる。二人が同じことを思いながら、話題は別なことを話し、互いに相手の過去を探る。場合によっては、それは相手の心をむき出しにさせることになるかもしれない。場合によっては、相手を慰撫して別のイメージに転化するかもしれない。高行健の会話は大体において、相手をむき出しにして、イラつく主人公の煩悶を浮き立たせる。ここでもすぐ続いて、

「こうやって生きてきたんだ。傲慢さがなかったら、今日という日もなかった」
「世を恨むのもいい加減にしなさい。苦しんだのはあなただけじゃないのよ。誰もが農村へ送られた。わかるでしょう。農村へ送られた女の子は身寄りもなく、男の人よりずっと苦労が多かった。私が彼と結婚したのは、ほかにそれ以上の選択肢がなかったからよ。彼の両親は手を尽くして、私を都会に呼び戻してくれたの」
「きみを責めているわけじゃない」
「あなたに私を責める権利はないわ！」
「誰にも他人を責める権利はない」（五一～五二頁）

となる。この会話は、二人の過去を実に簡潔にわからせる。したがって高行健の要領の良い会話能力もわかる。だから、飯塚氏は〝男女間の感情の行き違い、超えがたい溝は、この作家の永遠のテーマである。〟（二一一頁）と

いうのであろう。

先に述べたように、会話は状況を説明する効力を発揮するだけではない。一見すれ違いの会話に見える時こそ、つまり会話の飛躍に、別のイメージが喚起され、二人の関係があらわになる時がある。そういうものこそ会話の妙であろう。高行健にはどちらかというと、直裁に事柄を述べようとする会話が多いが、それでも、醸し出されるイメージが真実を伝える場合もある。これがその後も会話形式を多用する基になっているような気がした。

『母』に収録されている八篇は、男女間の超えがたい溝を描いている作品群であるといってもよいだろう。それは、のちの長編小説『霊山』や『ある男の聖書』に続く、高行健のテーマでもある。つまり、人生の経験を経た苦味のある物語、取り返しのつかぬ思い出と解脱できぬ意識とに拘泥せざるを得ない人生の話なのである。

七　蘇童――嗅覚の作家

二〇〇八年四月二日、大阪のドーンセンター五階で、蘇童という南京の作家の講演会があった。毛丹青氏がコーディネイトして、「関西国際観光推進センター」が主催するものであったから、中国の新聞雑誌テレビ局の人も入れて、六、七十人も集まったろうか。毛丹青氏が司会して、すべて中国語でやる会であった。東京から、蘇童氏の本『碧奴――涙の女』新・世界の神話第四弾（角川書店、二〇〇八年三月三一日、三一七頁、二一〇〇＋α円）を訳した飯塚容中央大教授もわざわざ駆けつけた。慶応大の竹内良雄先生や、中央大の堀内利恵先生、それに、近畿大の福家道信先生、佛教大の吉田富夫先生、関学大の西村正男先生、弘前大の楊天曦先生、弁護士の坂和章平先生、翻訳家の泉京鹿さんなどが集まった。神戸市外大の佐藤晴彦先生と京都外大の竹内誠先生は遅れて夜の懇談会から参加された。

中国語で聞き、話し、通訳なしであるから、日本語でも他人の話を聞き取れない私は困ってしまったが、順番に指名されてとにかく感じたことをしゃべった。

それは、たとえば蘇童といえば『紅夢』という映画を思い出す。中国語の映画の題名は『大紅灯籠高高掛』というが、これは張芸謀監督が一九九一年に作った作品だ。この映画は筋はもとより、赤いランタンに代表される色の

配置によってもわれわれには印象深い。張芸謀監督は色の芸術家、とりわけ赤色の妙による芸術家として日本では名高い。

ところが最近私はその原作である『妻妾成群』（『収穫』一九八九年六期）を読んでみて驚いた。感じがまるで違うのである。大体題名からして、あまり日本人好みの題ではない。この「蒼涼 cangliang」とした作品のムードは、私に言わせれば作者の「においをかぐ」嗅覚から来ているように思えた。主人公・頌蓮はにおいをかぐことによって、雁児のただならぬ行為をかぎつける。そもそも登場する出だしからして、彼女は「散発出紙人一様呆板的気息。」と描写されるではないか。これは、『離婚指南』（『収穫』一九九一年五期）ではもっとはなはだしく、出だしは主人公の楊泊が部屋の小便くささを嗅ぎ取るところから始まる。「房間里有一種凝滞的酸臭的気味、」とある。

今度の『碧奴』も、まだほとんどはじめの数ページしか読んでいないし、原文を見たわけではないが、孟姜女も汗や涙の臭いを嗅ぎ取れる。

これらはもちろん、物のにおいだけでなく「聞到気味児」は「知道情況的気雰」であるから、情況やその社会的ムードを表現しえる。彼の作品がほとんど「蒼涼 cangliang」とした感じなのも、嗅覚の鋭さというか物の本質を捉える一手段として「におい」を注視しているからであろう。決して意図的な注視でなく、本能的な重要視であるから、彼の語り口に引き寄せられ、彼の自然と発する深いどうしようもない諦めの感情に浸らせられるのであろう。それはニヒリズムではないと思うが、蘇童という作家には表面ではわからない、少なくとも視覚だけではない、嗅覚の鋭さと深遠さがあると思った。

八　李鋭の『太平風物』

授業でも、また一部の人へのメールにも、入院中に読んだ李鋭の本の感想について話した。例えばこういう感想である。

李鋭の『太平風物――農具系列小説展覧』を読んだが、これが意外にとても面白かった。言葉というか中国語がちっともわからなかったけれど、どんどん飛ばして読み進んだ。先の『厚土』にあった色気がすっかりなくなって、恐れと涙ばかりの農村というか、荒涼とした山西の土地が広がり、凄惶とした情景が現出するのだ。これが現在の中国とよくわかった。

簡単に言えば、この本で描かれているのは、すっかり若者がいなくなった農村なのだ。鉱山に買い占められたり、ゴルフ場などが拓かれる農村なのだ。農作業をしなくなった農村なのだ。農機具をもう使用しなくなった農村なのだ。樹木が切り倒され、農薬で除虫や除草をするので、ムシがいない農村なのだ。ムシがいないから、小動物も鳥もいなくなった農村が、そこに拓かれているのだ。私はろくに知らないながら、なんだか中国の山西の人工的に荒らされた山野が目に見えた気がした。

『太平風物』は、農機具を話の枕として使っている。それらは中国の春秋戦国時代から、或いは漢代からずっと

使用されてきたものである。殆ど変わらない器具を農民は現代まで使って辛苦してきたのである。それらを駆使し、長い歳月をかけて実りを迎える農耕を、もう継続できる人も環境もなくなった。大資本に隷属する貧困のままの農民がここにはいる。

振り返ってみれば、三十年前、同じ所に下放したときの話を描いた『厚土』には、同じ貧困でも、活き活きと生活している農民が出てきた。まさに貧農・下層中農の農民であり、文革の時代を担う精神の意気込みを体現している農民であったのだ。だから、村長を初め農民達は、猥雑ではあるが活力に満ちていたと言えた。『太平風物』に農機具を持ち出したように、李鋭が見た現代の農村は生を感じられない、死に瀕している場所だといえよう。だから出てくる単語は、恐れと涙が多かった。また、「他」ばかりで、「我」がないのである。『厚土』も「他」で描かれているが、そこには明らかに李鋭がいたというのに。

矛盾しているけれど、こういう荒涼とした世界を描いた李鋭の小説は、今の私にはとても面白かった。

入院中は当然の如く、文庫本一冊も読まなかった。でも、手術が軽く済んで暇になった。病院ではこんなペースメーカーの電池の入れ替えなど、病気のうちに数えてくれないくらいだが、当人にとってはなんと言ってもメスで切られるのだから、いやなことには違いなかった。

六人部屋に居たけれど、みな私よりは年上だ。前後左右の老人の立てる不快音には参った。夜になると、例えば尿瓶が立てる音でも妙に耳につく。その他のうごめいている音を聞きながら、私も一日一日ああいう風に老衰していくのかと思った。言ってみれば病院の大部屋には、一つの荒涼とした世界があるのだ。

私は一九九〇年の十二月に、李鋭氏と会った事がある。美人の奥さんと一緒であった。今、その時の写真を探しているのだが、ちょうどその時の山西旅行の部分がすっぽり抜けていて、見当たらない。　どこかに別に置いたの

であろうが、そうするともう見つけられないのが、今までの経験だ。残念な思いがする。

十一月三日(土)には大阪で、佛教大学の吉田富夫氏と対談するそうだ。翌日の四日(日)には京都で講演会をするという。『太平風物』は、読み進めていくと読み易い文章だ。是非『太平風物』を読んで、会に参加して欲しい。

九　金子わこ訳『じゃがいも』

金子わこさんから『じゃがいも』という本を貰ったのは、昨年の十一月末であったように思う。小学館スクウエアー、二〇〇七年十二月一五日、三一九ページ、一九〇五円＋税、の本は、カバーに安田れい子氏のじゃがいもの花が描かれている、きれいで、そこはかとない悲しみを感じる本であった。

ただ、その後の私の肩の痛みなどで、感想をなかなか書けなかった。今日はまた別の整形外科に行ったので、宿題のように思っていた、わこさんの『じゃがいも』について、少し触れよう。

この本に収録された短編小説は、飯塚容氏が主催した『季刊　中国現代小説』に発表されたものである。十篇ある小説は、遅子建、魯羊、邱華棟、畢飛宇、星竹、東西、葉弥の七人の若い現代作家の作品である。まさに当代の中国の作家の作品とはいかなるものかを知ることのできる斬新な得がたい作品集である。

実の所、私は解説に当たるような竹内実先生の〝たとえば「銀色の虎」〟という文章にある、

〝この一冊は翻訳からなりたっている。十篇、それぞれが文体をもっていて、物語をつくっている。なるべくなら一気に読まず、何日か、あいだをおいて読んでほしい。〟

という忠告にもかかわらず、一気に読んでしまった。

それは、金子わこさんの悲しみのある日本語に引きずられたからでもある。表題の「じゃがいも」にもある、淡い可憐な弱弱しい花が、私の感性を刺激したが、またその弱弱しさは、社会に対しての有効な力を持たぬということであって、実は一人ひとりの生としては、頑強で頑なな人生でもあることから来ているのである。まさに遅子建の「じゃがいも」という小説の冒頭のことばのようにである。

〝もしも、遙か天の川から七月の礼鎮（リーヂェン）を見下ろしたら、一面花盛りの花園が目に入るだろう。花は穂の形で、小さな釣り鐘のように下がり、空いっぱいの星と月の下で魅惑的な銀の色を浮き立たせている。声をひそめ息をころして、風が花たちを吹き過ぎるやさしい声に耳をかたむけるとき、あなたの魂は、何よりもまず先に、大地からたちのぼるいつまでも変わることのない芳香、あのじゃがいもの花の香りをかぎとるのだ。〟

まだまだ、引用を続けたいが、そして、私はじゃがいもの花などを見たこともないのであるが、このような描写の元となった作者の感情と、それを掬い、作者・遅子建と一体となった文体に、私は魅かれたと言ってもよい。

私は丁度、この時、上海小姐さんから頂いた『泥鰍也是魚』というＤＶＤを見たのだが、これと「じゃがいも」との相似を強く感じた。

『泥鰍也是魚』のことについては、『天涼』第九巻の六二頁～七三頁に藍天さんの詳しい紹介があるから、ここではもう述べないが、同じ東北での農民工の哀切で無残な生の一コマに憮然としたものであった。

農民工といわれる農民も金に拘束されているからこそ東北の片田舎から都会に出てくるのである。これが泥鰍（どじょう）だ。だが、その都会では一層厳重に搾取を受けざるをえない個体としての魚となるのである。田舎で一定の位置を占めていた牧歌的な泥鰍ではないはずだ。だから、泥鰍（どじょう）だって魚だというギリギリの声も、じつは無益な声でしかない。こういう現実を、中国の現代文学は果たして掬い取っていくのであろうか？

金子わこさんの翻訳集がきれいでよくできているからこそ、現在の文学の問題をもこの本は提起しえていると私は思った。

十　余華の『兄弟』

余華の『兄弟』という小説をやっと読んだ。上部十七万九千字（二〇〇五年八月）。下部三十三万五千字（二〇〇六年三月）という長編である。あわせて五十万字（中国語で）を超える。なぜこんなに長く書いたのか、私にはよくわからない小説であった。

というのも、描写に重複が多く、くどいところが多すぎるからである。たとえば、童鉄匠が出てくれば、余抜牙、張裁縫、王冰棍、老関剪刀、小関剪刀が順を追って出てきて、それぞれが何を言ったかが語られる。こういう場面が繰り返される。彼らは、舞台となる劉鎮の「群衆」を代表しているのであろうが、饒舌としか言えない部分が多い。また、主人公の李光頭が「福利廠」の「廠長」になるが、その工場の「両個瘸子、三個傻子、四個瞎子、五個聾子」に演技動作をさせる描写が毎回繰り返される。これなどは作者の笑を取る態度に大変違和感を感じて、単なる饒舌ではないものを感じる。そしてまた、たとえば李光頭が林紅という劉鎮一番の美人を好きになり言い寄る場面でも、くどくどと同じような場面が繰り返されるし、付き添いとしてついてきた義兄の宋鋼が同じように林紅の質問に対して「低垂着頭一言不発」なのである。宋鋼が義弟の李光頭や林紅に自分の気持を口で明確に言えば、少

なくとも似たような場面が繰り返されることなく展開する。こういう場面がほかにも多々見られる。

この『兄弟』という小説は、中国でも賛否両論が出て、そういう意味で評判になった小説である。今回日本でも翻訳が出て、日本の新聞には好意的な書評が出ている。私は日本語訳を読んでいないので、どのようにスムーズに訳されているか知らないが、きっと滑らかな良い訳なのであろうと思っている。

だから、あらすじはここでは述べないが、のっけから主人公の李光頭がトイレで女性のお尻を覗き見するところから始まる。次には八歳の李光頭がオナニーを覚えることである。それをまた他の者がからかう。確かに人生は食（個体維持）と性（類的維持）が二つの重要な要素であるかもしれないが、こういう題材を主要な線として話を続けることに、私は不快感を持った。文章がきれいでないとも感じた。わざとグロテスクで喜劇的に描かれているのだと感じれば良いのかもしれないが、それにしても背後にあるべき何かを私は感じなかったからだ。何かというとトイレを出すし、「首届全国処美人大賽」なるものを開催するドタバタの話になると露悪的としか言いようがない。「処美人」の「処」とは「処女膜」のことなのである。こういう話のほかにも荒唐無稽な話があって、最後に李光頭が「俄羅斯聯盟号」という宇宙船から宋鋼の「骨灰盒」を「太空的軌道」に流しても、私は悲しみも感動も覚えなかった。

小説であるから、歴史とは違う。また政治とも違うから、たとえば文革がいつからどうして始まったのかなどと書く必要はないだろう。ただ、上部（上巻）に出てくる文革は、すべて「戴紅袖章的人」が暴力を振るうだけなのが特色であって、一つの見識だと思った。「戴紅袖章的人」より上層部の者の名前は出てこない。というより、ないのであった。文革は名前のない一部の赤い腕章を巻いたものが行なったことになる。そういう情況の中で李光頭の義父・宋凡平は脱走したとして「戴紅袖章的人」十数人に殴ったり蹴ったりされて殺される。それを見ても、死

んだあとも、誰も近寄らず何の手助けもしない。死体は放り出されたまま、夏の暑さに腐り始め、ハエがわんさかたかっても、ただ見ているだけなのが「群衆」である。

「人怎麼会這様狠毒啊！」と叫んだ蘇媽や通行人に過ぎなかった陶青という、周りの無関心な「群衆」の中にも、特別に親切な人が存在した御蔭で、彼ら兄弟は父親の死体を家まで運ぶことが出来た。

「群衆」は無関心である。係わり合いになっては困るという面もあるが、とにかく見ているだけで、警察を呼ぶわけでもない。警察組織みたいなものが機能していないところに、というより存在しないところに、文革中はもちろんのこと、私は今の中国にも人権がないといつも感じている。個人を保護するような組織も機関もないのである。人はむき出しで生活しているから、いつも自分の身は自分で守らねばならない。どうしても他のことには無関心にならざるをえない。

ところが、そんな中でも蘇媽や陶青のように異常と言っていいほどの親切な人もいるのだ。この陶青という人の親切は、日本の親切と違うものを感じて意義深かった。一度頼まれれば、関係（血縁や知人の関係）が何もなくても、また途中で邪魔が入ってもやり通す、そういう信義に近いものを感じた。そして子供たちも、あとから帰ってきた子供の母親も、そんなにすぐ陶青を尋ねてお礼を言うわけではない。ずっと後の偶然から、陶青が援助してくれた人だと知った母親が「叩頭」の礼をするまで、何の御礼もしないのを不思議に思った。でも、こういう損得を離れた人々の援助があるから、兄弟は育つことが出来たのであったろう。

この小説には毛主席語録からの引用や、有名なことばの転用など、そこここに風刺するものがあり、皮肉る姿勢がある。その姿勢は一貫しているが深みを感じなかった。軽やかに笑えばよいのであろう。余華はこの長編をこれまでの人生の一つのまとめとして提出したのであろう。現代の風俗としては下部（下巻）にあるように、行商に出

て、豊乳手術を施したりするなど最新のものをかなり取り入れてそれが参考にはなる。しかし、底につながる何かが欠けているような気がした。

また、日本もかなり多く出てくる。日本人の名前が四文字であるのが「太麻煩」と出ていて、私は妙に納得した。反日運動も「小泉純一郎」の「靖国神社参拝」反対も出てくるが、たとえば日本から仕入れた古着の背広の内側にネームが入っていて、それが「松下」だの「三洋」（日本にそんな姓があったろうか？）となっているのを自慢したり、果ては「福田」まで出てくる。こういうくすぐりとしか言いようのない話に付き合うのは、正直疲れることであった。

上部（上巻）と下部（下巻）とでは幾らか書き方が違ってきていた。また兄弟の強い絆が築き上げられるにふさわしい感動的な場面を私は読んだという気がしないのだが、今日はここまでにしておこう。

十一　茹志鵑追悼

作家・茹志鵑が亡くなった。茹志鵑さんが亡くなったという。一九九八年の十月七日のことだそうだ。七十三歳。心臓病。まだ若かった。

彼女の短編「高高的白楊樹」が好きだ。私には、まだ見たこともない高い高いポプラを思い描くことができる。そして、そこを吹き抜ける風の音がいつまでも私の耳に聞こえるような気がする。

短編「春暖時節」も好きだ。主人公の一介の主婦の焦燥から、初めて上海の庶民の生活が描かれた作品だと思わせた。資本主義で堕落している筈の日本のこの私でも、中国人の心を身近に理解できることを知らしめた作品ともいえた。

彼女を私が知ったのは一九六五年四月、中国作家代表団として京都に来た時だ。老舎が団長、張光然（年）が秘書長だった。他に劉白羽と杜宣、それに黄世明が通訳であった。

京都で茹志鵑の話があった夜、私もその他大勢の一人として聞きに行った。彼女が何の話をしたか、今ではよく覚えていないが、なんでも近頃では髪をパーマにする者がいて、頭が鳥の巣のようなのがいるとか言ってわれわれを笑わせた。私は彼女の言う〝乱蓬蓬〟や〝鳥窩〟という単語を耳にしながら、彼女の顔を見入っていた。けっし

て美人ではない。がっしりとした輪郭で、むしろ逞しいといった方が当たっているだろう。でも、彼女の一途で真摯なマスクから、私は〝美しい〟ひとを見たと思った。

その後、文革が始まり、彼女の消息も知れなくなった。私は一編の文章を書き、彼女の作品には〝回想〟場面が多いことから、彼女のリリシズムはそこに起因すると述べた。私の脳裏には、中国の当代文学は趙樹理から始まり、茹志鵑で新たな展開があったという輪郭ができた。

一九八一年五月、私は上海へ行くチャンスがあった。茹志鵑への会見を中国作家協会上海分会を通じて申し込んでみた。うれしいことに、彼女はホテルまで会いに来てくれた。錦江飯店はこの著名な作家もすんなりと入れさせず、私への通知もかなり経ってから連絡してくるありさまであった。彼女は随分苦労して外国人たる私に会いに来てくれたらしい。まだまだ改革開放は進んでいなかった。

そんなことを一言も茹志鵑は私に言わず、終始にこやかであった。私の方は、嬉しさのあまりにすっかり舞い上がり、録音テープを、カセットのejectを押さずに、力任せに蓋を開けたので壊れてしまい、録音ができなくなってしまった。焦っている私に彼女は言った、「録音などしなくて良い。録音しなければ残らない言葉など大したことはないじゃないか。録音しなくても、本当に私の言葉が有意義ならば、お前の心に残っているはずだ」と。

八一年の会見で残っている言葉はほとんどない。ただ、彼女が訴えるように、文革中は私に大作品を書くように強制されたよ、と言ったのを覚えているだけだ。私が、貴方にそんなことをさせたら、文学を殺すようなものだと言ったのを、いくらかでも慰めとしたかもしれない。それ以上、言葉は進展しなかった。

八二年六月、茹志鵑は厳文井と陳舜臣宅を訪れた帰りに京都に寄った。そのことを私が知ったのは、もう京都を発つ当日の朝であった。私は食べるものもろくに口にせず、大急ぎで彼女のホテルを訪れ、駅まで見送った。

京都駅で私が一行と離れて入場券を買いに切符売り場へ向かった時、ふと見ると、彼女一人がこちらを心配そうに見て、じっと立って待っていてくれた。私が慌てて切符を購入し彼女のもとに駆け寄ると、彼女はそこでやっと安心するように一緒に歩みはじめた。こんな些細な動作が、私を感動させた。

思えば、かつて中国を訪れた曽野綾子が、ある文章のなかで茹志鵑に触れていた。曽野綾子の中国紀行に何人かの中国人の作家が随行したり応対したが、茹志鵑だけが彼女に「どんな作品を書くのですか？」と聞いたという。たしか、茹志鵑だけが人に対する配慮があると書いていたと記憶する。この観測はなかなか鋭いと思う。

八二年六月一九日に京都駅で茹志鵑が東京に帰るのを見送って以来、彼女と連絡も何もしないまま今日までに至った。

彼女のあの美しい顔と、優しい配慮とは私の宝となって残っている。だから学生が茹志鵑のことを話題にすると、私はいつも、茹志鵑は〝美しい〟ひとなんだよ、と言う。

わが〝美しき〟ひと茹志鵑、安らかに眠れ！

十二　山西省の作家・焦祖堯

はじめに

かつて私は大同の雲崗石窟へ向かう車窓から見える大地の色に、言い知れぬ感動というか驚愕を感じたことがある。そこに見えるのは、土地ではない、という感慨であった。少なくとも私の知っている「土」ではなかった。色といい、土質といい、それは岩石というか岩盤とでも言うべきものであった。それにもかかわらず、ほんの僅かに窺える家、あるいは窰洞、もうしわけ程度にある木々などから、こんな所でも人が住んでいるのだということを知らされ、私は驚愕したのであった。しかも、人が生きてきたのは今に始まったことではなく、日本などという国ができる以前から、ここで人が耕し、水を飲み、生きてきたのである。

だが、いったい何処に田んぼがあり、水飲み場があるというのか。いや、ありそうに見えるというのか。この茶色というより鉛色といったらいい、ごつごつしている「土」のどこに植物などが生える可能性がありうるのか。平たく続く平原のようでいて、そのくせ、ところどころ陥没して深い切り込みができている。こんなところにも、人は耕作して生きてきたのかと思うと、大地の質の違いに恐ろしくなるとともに、人間というものの飽くなき生への

営みに感じ入った。

これは一九八〇年の十一月のことであったが、翌年の八月に、石太線で河北から娘子関を通過して山西省に入った時にも、同じような感想を持った。この時は土の色がいっそう黒々と見られたものであったが。華北の黄土高原の特色は山西にこそよく見られる。

山西省とは、こういう意味で私には特別な意味合いを以て印象づけられた。

このように人を拒絶するような所に、日照りと闘い、そしてもし雨でも降れば一気に崩れ流されてしまいそうな所に、人は穀物を植えてきたのだ。温和中庸な日本の風土といかに異なるか、いまさらながら思わずにはいられない。中国人はその多くが、なげやりで、物憂さそうで、唯々諾々としているように見えるが、しかしその内に秘めた激しさと気力とを、察知しておかねばなるまいと思う。

私が今ここに紹介しょうとする焦祖堯（しょう・そぎょう、Jiao Zuyao）は、山西の北部、大同を舞台にする鉱山労働者を主に描き、その人々の生への本来的な発露を問おうとする。煩雑な現実生活にあって、その人本来の生の発露などという情念は、内に秘めた激しさと気力とがなければできないことなのである。

一、経歴について

焦祖堯は一九三五年（以下、一九〇〇は省略する）六月三日、江蘇省武進県の農家に生まれた。[1] 六歳の時、外祖父の家から小学校に通うことになった。この外祖父が偏屈で怒りっぽかったので、焦祖堯は内向的で物思いにふける子供となり、作文の授業を好んだ。中学に入ってから小説を書くようになった。家の困窮により中学卒業後、江蘇

省蘇南工業専門学校の自動車モーター製造コースに進学した。だが、文学への関心を捨てきれなかった焦祖堯は、自分の苦衷を手紙に書いて丁玲に相談したという。[2] 丁玲は返事をくれて、いま学んでいる理系のこともきっと創作に役立つことになるから、今という時を大事にして一生懸命勉強するように、と言ってくれた。

五五年九月、彼は分配されて山西省大同にある国営工場六一六廠の技術員になった。仕事も生活もかなり厳しいものであったが、彼は技術者としての仕事の余暇に創作に専念した。「当時は会議が今ほど多くなく、夜はだいたい利用できた」と皮肉っぽく書いているが、それでも宿舎が四人一部屋なので、他の者の睡眠の邪魔にならぬよう台所で書き物をするなど苦労したこともさり気なく書いている。[3] こうして彼は、一年余りの期間に、一千万字の本を読み、数十編の習作をものにしたという。

私はこういう話を聞くたびに、圧倒される。そして何か違和感をいつも感ずる。何万字の本だの原稿だのと中国の人はよく言うが、何でも数量化してものを見る発想が文学にも貫徹していることに、私は感嘆せざるをえない。自らを反省して言えば、少なくとも習作の時期には、このように徹底的な量的な修練が必要なのであろう。そして敢えて言えば、私のみならず日本人にはこの点がやや欠けていると言えるかもしれない。きっとそうに違いない。だが、正直のところ、私は後ろを向いてでも、こういうやり方に嘆息せざるをえないのである。

それはともかく、焦祖堯はこうして創作の基礎を形成した。そして、山西省の文連（文学芸術界連合会の略称。この組織の中に作家協会も所属する）の雑誌『火花』五七年第一期に「両個年軽人」という処女作が掲載された。[4] その後、彼の作品は全国の文学雑誌に続々と掲載されるが、今、私が読むことができた最も早い作品は、五六年七月に書かれたという「資料員老楊」である。この作品や次の「時間」については、「二、作品について」で触れよう。

焦祖堯は六一年秋、大同市の文連に移された。彼はこの時、炭鉱労働者の生活を集中的に知るようになる。彼の

大部分の作品が炭鉱生活を描くことになる基礎がこの時形成されたのである。この時期の代表作が「時間」である。[5]

プロレタリア文化大革命（以下、文革と略称）が始まると批判闘争にあったが、七一年と七二年、彼は雁北の貧しい山村へ下放させられた。工場や炭鉱だけでなく農村の生活を体験したことは、彼の以後の作品、例えば「跋渉者」の主人公などの形象に幅を持たせることとなった。

「四人組」粉砕後、大同市の文連副主席になり、七九年に中国作家協会会員となった。八〇年太原にある中国作家協会山西分会に移り、八八年から山西作協党組書記、分会主席になっている。言うまでもなく中国共産党党員である。

八四年末から八五年初めにかけて、中国作家代表団団長としてタイ国を訪れた。また、九四年には副団長として米国を訪問している。

二、作品について

焦祖堯は短編、中編の小説や報告文学（ルポルタージュ）や散文などのある多作な作家である。[6] ここでは、作品のそれぞれについて説明紹介することはしないが、どのような作品があるかについて一覧表にしたものを、文末の三一三頁に「焦祖堯作品一覧表：執筆順」として掲げるので参照して頂きたい。

今、大きく三つの時期に分けて見てみよう。第一は文革までの「初期」。第二は、作品「跋渉者」を中心とする時期。第三は、それ以後現在まで、といった風にである。そして、「初期」から短編小説「資料員老楊」と「時間」を、第二では「跋渉者」を、第三では「魔棒」を取り上げて紹介することにする。

（一）「資料員老楊」と「時間」

処女作「両個年軽人」を見ることができなかったので、私が見た最も早い焦祖堯の作品は、「資料員老楊」である。この作品について先ず紹介しよう。

主人公の「私」は工場に来て一週間後、工芸課に配属された。「私」は現場で働きたかったので、室内の仕事に回されて不満であった。最初の仕事は設計図の借用であった。貸出係の老楊は偏屈な親爺として有名であった。年は四十七、八歳ぐらいで、もと解放軍の炊事係であったという。彼は設計図の貸出や返却に際して設計図をいちいち眺め回し破損がないか調べる。返却時に汚損があれば、自分の宝物が被害にあったように文句を言う。皆は老楊の時間がかかるやり方に苛々して不満をぶつける。「私」も生産増大に邁進している工場の現状に照らして、彼の対応に腹が立つ。たかが紙切れではないか、と。だが老楊は祖父のように「私」に親切に教える。いくら口で社会主義や共産主義が言えても、設計図を大事にしなければ駄目だ、設計図は工場の法律なのだ、と。「私」は、設計図を借り出すことは老楊の心を借り出すことなのだとわかる。これ以後、「私」は設計図を大事に扱い、工芸課の仕事に心を込めた。ある日、急ぐから例外的に貸し出してくれと要求する者と老楊は大喧嘩をした。彼は規則を楯に拒否したのだ。課長が臨機応変にやれと取りなしたり、上役の地位を利用して貸し出させようとするが、老楊は断固として拒否する。老楊はこのことで党書記の批判を受ける。自分が「党のため」と思ってやることでも、やり方がまずく、規則を楯に喧嘩していては解決しないと諭され、老楊は課長に謝りに行く。老楊は設計図を私物のように大切にし、自分の仕事が全体の役に立つと信ずると妥協しない。こういう公のために自分を奉仕する姿が、「私」には、ソ連映画「村の女教師」の主人公の形象と重なって見えた。

以上があらすじであるが、このようにやや長く紹介したのも、ここに後の焦祖堯のモチーフやテーマがよく出て

いるからである。処女作を含めて、えてして初期の作品は、その作家の姿をよく伝えるものである。ここに見られる「公のために奉仕する」姿こそ、焦祖堯がその後一貫して追求する主人公像なのである。(7)

もう一つ、六五年の上海の文芸雑誌『収穫』に載った「時間」という短編小説をとりあげよう。これは、炭鉱で働く父子の話である。父は、息子に時計を買ってやった。昇格試験に合格したからだ。しかし、父は息子がまだ本当の労働者になっていないと言って、自分の持ち場に配属させた。そして「わしの時間にしたがえ」と言う。父は出勤時間より早く仕事に出て、皆より遅く退勤する。こんな態度に息子は、「八時間労働は国家の規定だ」と言って不服である。出水の事故が起きた。息子は初めての事故に慌ててモーターのスイッチを入れてしまう。大急ぎで坑木をモーターの下に敷かねばならない。寸時を争う闘いに二人は熱中し、落とした時計も拾わず、水を汲み出すことに成功した。ついに時間に勝ったのだ。父は「時間は時計の上にあるのではなく、心の中にあるものだ」と息子に言い、息子が「いつまでも、父さんの時間にしたがうよ」と言うことで話は終わる。

この「時間」という小説は、『中国文学』の英語版と仏語版そして日本語の『人民中国』にも訳出された如く、なかなかの好短編である。息子は時間の質的意味を体得したことによって一人前の労働者になれるのである。父の言う「時計をはめるだけが能ではないぞ。われわれ労働者階級はこれから社会主義、共産主義を建設せねばならんのだ！」という言葉は、焦祖堯の信念でもあろう。自分のみの生活と、ここでは鉱山労働者全体という公の生活との対立葛藤の超克が描かれる。

公と私の矛盾葛藤は、いつの時代どこの国でも容易に解決しえない問題として我々の前に提示されている。我々はどうしても安易で怠惰なやり方に流されてしまう弱さを持っているのであるが、その最大の原因は、「時間がない」「早く」等々といった言葉に表れている効率主義にある。これがつい、自分たちが決めた基本的なあり方を、

ルーズにしてしまうのである。こんなことは、日常の些細な事柄の一つ一つによく見られることではないだろうか。とすれば、生活とは如何に日に日に人間を安易につかせる妥協の産物であることか、と思う。これに反対して、本来のあり方にそって生き抜こうとすることは、人間の怠惰という底無し沼に棹をさすようなものである。これは信念というか気力の問題である。焦祖堯はこういう平凡な日常生活の中で大変なエネルギーを発する人物を描いているのである。

(二)「跋渉者」

長編小説「跋渉者」を書くまでに、焦祖堯は幾編かの小説や報告文学を書いていて、それぞれに面白いが、今はそれにいちいち触れている余裕がない。

「跋渉者」は、二十年後に炭鉱に戻ってきた技術者が、労働の質と安全とを高めるために、単純な生産高万能主義といかに闘っていくかという話である。これに元の恋人との愛の話が絡むが、恋愛の話はいかにも八二、三年当時の開放された社会状況を反映しているように思える。焦祖堯は、生真面目でごつい感じの男に私には見えたが、意外にも女性を描くことが好きなようで、この作品も丁雪君が「私」として狂言まわしになり、彼女の目から見た話が進行するのである。丁はすでに若くはないが、接吻を主人公の楊昭遠に積極的にしたりする。文革後、キスシーンを描いた最も早い作品は蔣子龍の「喬廠長上任記」(七九年)であるが、同じく工業題材を扱ったこの作品にも愛の表現として接吻が出てくるのを面白く感じた。

さて、物語のあらすじは紙幅の都合上省略させて頂くが、話の中心は新たに主任の肩書で炭鉱に戻ってきた技術者の楊昭遠と、かつて楊昭遠を追い落とした弁舌のたつ党委員邵一鋒との闘いである。労働者の安全と生活向上を

願う楊の発想と邵の生産第一主義との争いである。そして、それは実は、邵の後ろ楯として存在する上級の指導者と、楊との争いでもある。「国のため」という公の提示が石炭生産高の増額に単純化されると、数字のみが先行し、人々は数字に振り回される。指導者は数字を増加することで地位を安泰にする。指導者のてこ入れで、現場にも数字増加に呼応する「模範労働者」が出現する。こういう「模範」が、がむしゃらに生産高の増加を目指して、安全への配慮も、同僚の健康も無視して昼夜兼行で働き、表彰される。そして少しずつ特権を身につけていく。したがって「模範」という特権と数字とに幻惑された現場も、楊の考えとは相容れず対立することになる。一方、指導者は生産を上げ「国のため」に貢献したということで、またまた昇進していく。こういう現場と指導者との連関した現状を打破しようとすれば、上からの圧力と下からの反発を受けねばならない。なまじの努力や決意でできることではない。この作品には、もと「右」派の主人公楊昭遠の、この連関を打破しようとする凄まじいエネルギーが描かれているのである。

だが、私的には何の益もないばかりか、身の危険性さえある現状打破の仕事を主人公はなぜするのだろう。恋人からも、やめてくれと懇願されるのに、人はなぜこんな無益なことをするのか。こうするのも「人民のため」、「国のため」すなわち公のためである。

焦祖堯の作品では、「人民のため」と「国のため」とは同意語である。労働者が「人民」で、幹部や指導者が「国」というわけではない。どちらも四つの現代化の現在にあって、同じく努力しているのである。だが、現実には明らかに、私欲のためとしか見られないあり方とそうではないあり方といった違いがある。現実に違いがあるならば、この言葉にやはり二重性があるのである。「国」や「人民」といった公の目的に違いがあるわけではなく、その目的に達するためにいかなる方法を取るか、という点に差異があるのである。

同じ公のためと言いながら異なるこの二重性が、改革をそう簡単に進行させない。改革はやはり言葉や意見、すなわちイデオロギーで進められるからである。言葉にある虚偽性を先ず突き破らなければ、弁のたつ者に牛耳られる。邵一鋒が弁のたつ者を代表している。しかし、現実には人々は、それが労働者であろうと農民であろうとあるいはまた幹部であろうと、なかなか雄弁な者を打ち倒せないものである。これは文革で経験したことではないか。こういう現状の重さと、不変のからくりとを焦祖堯は見逃さない。そしてそれを身近に見られる、模範労働者と幹部、幹部と上級の指導者という構図のなかに表現したが故に、この作品は、第一回の人民文学賞などの賞を受けたのである。(付録の一覧表を参照されたい)。

自分には何の益もなく、身の破滅を招くことになっても、現状の不正と、それを指導する幹部への批判をおこなう主人公の行為を読んでいて、私は趙樹理のことを思い出した。[8]「跋渉者」は「モンタージュ」の技法を取り入れていると指摘されているように、[9]趙樹理の作品と焦祖堯とは一見して違う。だが、そういう新しい作品にしても、脈々と伝わる山西省の前代の作家あるいは前前代の作家の心が、焦祖堯にも流れているように思えて、感慨深かった。[10]

(三)「魔棒」

焦祖堯は小説のみならず報告文学も多く発表している。例えば「跋渉者」のような改革に邁進する人物を扱うならば、直接改革に挺身している生身の人物についての報告の方が事実という強みもあって、訴える力が強いかもしれない。焦祖堯は報告が単調にならないように、報告の仕方にいろいろ工夫を凝らしている。それらの中には、貧困のために死んだ三十六歳の女で、彼女の死後も金に苦労するという、私が好きな「把愛長留在人間」もあるし、

山西師範大学学長になった陶本一についての報告「犁」もある。だが、これらについての言及も省略に従わざるをえない。（付録の一覧表を参照されたい）。

「跋渉者」を書いた後の焦祖堯は、いかに「跋渉者」から脱出するかという点に苦労したような気がする。八三年二月の「長白毛的耗子」という短編小説では、炭鉱内に伝わる白い毛の鼠というディテールを使って、フィクション性というか幻想性を意識的に強めていることにも、それが窺える。描写も、ここで引用する余裕がないのが残念だが、巧みになってきて、詩意に富んだ文章がある。こういう、事実を幾らか飛翔した姿勢は、中年女性の人生への失落感のようなものを扱った短編小説「晨霧」に、そしてまた、一人の男の悲しみを病室から描く短編小説「病房」に、繋がっていくのである。

今、私は「飛翔」と言ったが、それは「霧」と言い換えてもよい。焦祖堯は一方で直截明快な思考態度を登場人物に求めているが、私には一方で、そういう方向では捕捉できない人生の陰の部分があることを強く意識していたに違いないと思う。なにか靄のようなもの、霧のようなものが作品にかかってきている。曖昧さの肯定が、私の言う第三期の大きな特色である。そういう意味で、八六年の中編小説「魔棒」を代表とするのである。

「魔棒」の主人公は、自分の弁舌と事務能力とによって地位と女とを獲得していく中級幹部である。主人公は「跋渉者」と同じように公に邁進する人物であるにしても、改革推進者ではない。「跋渉者」に出てきた、主人公の敵役にあたる人物が、「魔棒」の主人公なのである。主人公の昇進に立ちふさがるのは、無欲の科学者と正義感の強い若者である。この葛藤に、主人公の上司との関係が絡んで話が展開する。これでは、「跋渉者」の人物構図の裏返しにすぎないと言えなくもないが、それは致し方ないことであろう。私は中国の現状の構図にそう変化はないと思うからである。

「魔棒」は、中級幹部がいち早く情報を利用することや、相手方の科学者の成果を巧みに自分の有利になるよう取り入れていくさまや、妻とは違う浮気相手の女のやんちゃな性格が却って主人公の心の落ち着きをもたらすことなど、管理社会に生きる中間管理職の心理を扱った小説として、おもしろい。相手の科学者が新しい発見をして、金の延べ棒のような形の表彰品を貰った。この情報を不倫相手の女の弟が北京からもたらし、証拠のように、その金メッキの棒を送ってきたのである。さらに、この科学者は米国へ研究視察旅行に行くだろうとも言ってきた。主人公はこの情報が漏れないうちに、自分が科学者の才能を早くから認めていたように見せかけて、科学者を自分の陣営に取り込もうとする。そのためには、上司にあたる市の指導者をも出し抜き、この上司を引退に追い込もうとする。最後の一手で策が成功するというときに、科学者が戻って来て、情報が根も葉もない嘘であり、金の棒も不倫相手の女の弟の悪戯であったとわかり、どんでん返しとなる。

これは日本でいう大衆小説に属する小説かもしれない。あるいは、中間小説というものかもしれない。私は、大衆文学は純文学に比べて価値が低いなどとは思っていない。むしろ中国の作家は、このような中間小説をもっともっと書くべきだと思っている。少なくとも、こういう小説に見られる作者ののびのびとしたタッチと遊び心は、作品を高めこそすれ決して低めないからだ。試みに次の描写などはどうであろう。

「道理は同じさ。この書記という役について以来、一日としてのんびりした日をすごしたことがないよ。お前だって知らないはずはあるまい。私は早いとこ退いて、楽をさせてもらって、ふたりして名所巡りでもしたいと思っているよ。黄山にはまだ行ったことがないね。こういうところへ行っていないと、一生悔やむことになるだろうさ」

藍一丁のこの話は、ほとんど思いつきで言ったことだが、それだけに心底からのものであった。ただ言いおわってからふと、今の話が半分は嘘だと感じた。なんと妻の前では、考えることもなしにひとりでに嘘を言うなんて、これは何時から始まったことか。何に起因しているのだろう。では、彼は誰に対してなら真実が言えるか。娘か？むろん駄目だ。それではあの女葉冠芳だけということになる。だが実のところ冠芳の前でだって、まるっきり安心してしゃべれるというわけでもない。それでは彼には本当の心の友がいないということになるではないか！[11]

主人公藍一丁が妻と久しぶりに雑談をしているところの描写だが、この雑談もオールドミスの一人娘の誕生日に、当の娘がまだ帰宅していないので、やむなく始まった会話の一部である。ここには、妙に年寄り染みてしまった気弱な物言いが見られる。それは実は結末の逆転する敗北を暗示しているのだが、それはともかく、ここには仕事に追いまくられている男がふと感ずる、心の底から話をする相手がいないという孤独感が滲み出ているではないか。

そして、こういう描写は、描写の背後にある中国社会が、すでに日本や欧米に見られる競争に明け暮れる社会になっており、そこに生きる中間管理職が、同じように疲労し孤独になっていることを感じさせるといえよう。そういうリアリティをもった筆遣いだと私は思う。

おわりに

最後に九三年の短編小説「帰去」に少し触れよう。[12] アメリカ資本によって運営される炭鉱の合理主義的労働管理

になじまず、故郷に帰って農作業をすることにした男の話で、外資導入とその現代的管理が現実を反映している作品ではあるが、私には、作品が図式的で漂うものが無いように思えた。元に戻っても、もう同じ元のままではない。このことも描かれているが、それならば、どこに作者は視点を定めるべきなのか。

それが定まったとき、焦祖堯の新たな第四期が始まるのかもしれない。

注

（1） 焦祖堯の経歴については、次のものを参考にした。

①『中国文学家辞典』三（同書編委会編、四川文芸出版社、八五年二月）五七五頁

②『山西作家群評伝』（崔洪勲編、作家出版社、九〇年五月）一四七～一五七頁

③『中国文学大辞典』八（総主編馬良春・李福田、天津人民出版社、九一年一〇月）五七七六頁

④『中国作家大辞典』（中国作家協会創作聯絡部編、中国社会出版社、九三年一二月）五三〇頁

また、焦祖堯自身が書いた「学歩拾零――我的第一小説発表之前」（『山西文学』八五年三月、七〇～七二頁）をも参考にした。

（2） 丁玲（一九〇四～八六）は、かつて中央文学研究所（のち文学講習所と改名）の所長をしていたこともあり、後輩の指導に熱心であった。彼女が若い青年たちを指導したことは、他の多くの資料によってもわかるが、それは五七年の丁玲批判の時には却って、自分の派閥を作るものだという批判点の一つになっていた。

この間のことは、「学歩拾零――我的第一小説発表之前」（注（1）参照）に詳しい。

（3） 「学歩拾零――我的第一小説発表之前」（注（1）参照）七二頁

同室の者すべてが、焦祖堯が夜おそくまで灯をつけて勉強することに好意を持っていたわけではない。そこで、彼は小さな台所に移って勉強したが、水を出しっぱなしにされて被害をうけたことがあるという。この問題は党の配慮で別室が与えられて解決したが、いろいろな衝突が同室の者同志であったに違いなく、焦祖堯はこの体験に強く思うところがあったのであろう。八三年の中

編小説「這里是湛藍的天」では、主人公の息子とその同室の者との些細な喧嘩が大問題に発展している。

(4)　山西省は、趙樹理（一九〇六～七〇）という作家を代表にして農民を描く作品で特色づけられる。しかし、建国後は第一次五か年計画（五三～五七）に見られるように重工業に力点がおかれ、山西でも石炭や鉄鋼などの鉱工業に力がいれられた。それを反映して山西省の文芸雑誌も『火花』と名付けられた。焦祖堯はこういう雰囲気のもとに育て上げられた新進気鋭の作家であった。

なお、短編小説「資料員老楊」は、『新港』五八年一期に発表され、短編小説集『光的追求』（注(6)の⑦参照）二九四～三一一頁に収められている。

(5)　短編小説「時間」六四年一二月一〇日三稿（『収穫』六五年一期、四～一二頁）。

この期の短編小説は、小説集『光的追求』（注(6)の⑦参照）と『復蘇集』（注(6)の⑨参照）に収録されている。（付録の一覧表を参照されたい）。

(6)　今知ることのできる作品、作品集には次の十二種がある。

①『故事発生在双溝河辺』（短篇小説集）上海文芸出版社、六〇年
②『春天在榆樹堡』（短篇小説集）山西人民出版社、六二年
③『紅色技術員』（報告文学）山西人民出版社、六五年（苡琦と）
④『五十年滄桑』（家史）山西人民出版社、六六年
⑤『在陽光下』（短篇小説集）山西人民出版社、七五年
⑥『総工程師和他的女児』（長篇小説）人民文学出版社、七八年一二月、五七九頁
⑦『光的追求』（短篇小説集）江蘇人民出版社、八一年七月、三九二頁
⑧『跋涉者』（長篇小説）人民文学出版社、八四年四月、二八八頁
⑨『復蘇集』（短篇小説集）工人出版社、八五年六月、四二三頁
⑩『魔棒』（中篇小説集）中国文聯出版公司、八八年五月、二五九頁
⑪『火、犁、人間和明天』（報告文学集）北岳文芸出版社、九〇年一二月、四五一頁

⑫『故壘西辺』（中短篇小説集）作家出版社、九五年九月、三八五頁

（7）補足すれば、この小説にソ連映画が出てくるが、それが一つの評価基準となるところに当時の世相が反映している。だが、こういう外的評価を肯定する書き方は焦祖堯にいつまでも続いていて、私は欠点だと思っている。次の「跋渉者」にもこの書き方は見られるが、九二年の中編小説「故壘西辺」では、折角、中国農村の転換の有り様を描いているのに、国外知識を散りばめた文章が煩わしく、描写された農村のリアリティを損なっているような気がする。

（8）趙樹理の作品に流れている農民（人民）への愛情から感じて述べたのであるが、そもそも趙樹理の処女作ともいえる「小二黒結婚」や「李有才板話」などは、村のボスの不正とそれを阻止しえない幹部への批判、すなわち官僚主義批判の作品であったことを思い起こして頂きたい。また、趙樹理自身の行為についても、特に大躍進時期（五八～六〇）の、身の破滅を招くことになっても構わずに不正を批判したこと等については、趙樹理の各種の伝記や、王中青・李文儒「記趙樹理的最后五年」（『新文学史料』八三年三期。『季刊　中国研究』八五年創刊号に訳出）や丁抒著、森幹夫訳『人禍』などに記載がある。また、拙文「文化大革命と文学者」（本書二一頁以下）を参照されたい。

（9）何鎮邦「焦祖堯論」（『批評家』二巻四期（八六年七月）五七頁

また、崔洪勲編『山西作家群評伝』（注（1）の②）に楊品・王君の文章があり、その一五五頁でも同じように指摘されている。

（10）山西省の作家達について、私はかつて紹介の文章を書いたことがあるので、それを参照されたい。「〝晋軍崛起〟――地方文壇の気魄」『東亜』二三一号（拙著『中国〝新時期文学〟論考――思想解放の作家群』関西大学出版部、九五年九月、所収）

（11）中編小説「魔棒」（『黄河』八六年四期）三八～三九頁

（12）中編小説「帰去」九三年五月大同南郊（『人民文学』九三年一〇期、四～二〇頁）

この中編小説については、次の評論がある。

・王巧鳳「霊魂的――読焦祖堯近作『帰去』」（『文芸報』九四年七期）

表：「焦祖堯作品一覧表：執筆順」

〔↓印は関連するもの。⇊印は転載を示す。⑥～⑫等については、注6を参照〕

執筆年月日	作品名	『掲載誌・紙』年・期	備考
五六・五	両个年軽人	『火花』五七・一	（第一篇小説）
五六・七	資料員老楊	『新港』五八・一	⑥、⑨
五八・七	月季花	『雲岡』五八・一〇	⑥
五八・一〇	山薬蛋種子的問題	『火花』五九・二	⑥
五九・春	故事発生在双溝河辺	『火花』六〇・五	⑥
六一・五改	我的師傅	『延河』六一・八	（六〇・一〇初稿）
六一・五	春天在榆樹堡	『火花』六一・一二	⑨
六一・七	在陽光下	『火花』六一・一〇	⑥、⑨
六二・三	褚三這个人	『火花』六二・五	⑥、⑨
六二・三	苦艾子	『延河』六二・七―八合	⑥
六二・春	学歩記	『火花』六二・八	⑥、⑨
六二・七	煤的性格	『火花』六二・一〇	⑥、⑨
六三・九	泉	『火花』六三・一一	⑥
六四・一二・一〇	時間	『収穫』六五・一	⑥、⑨（三稿于大同）
⇊『人民中国』六五・八			
六五・五	雲岡一少年	『人民文学』六五・八	（徴文）
六五・八	做聡明的傻瓜	『汾水』七八・一	⑦（長篇小説『総工程師和他的女児』中的一章）

↓『文芸報』七九・五　謝明清「『総工程師和他的女児』」（新収穫）
↓『Chinese Literature』七九・一一　[Chronicle]
↓『山西師院学報』八一・二「生活之樹常青――創作『総工程師和他的女児』的回顧」
↓⑦『総工程師和他的女児』人民文学出版社、七八・一二。五七九頁（六五・一～六五・七初稿　七七・一二～七八・二二稿
七八・四定稿于大同）

六五・秋　崗位　『火花』六五・一〇　⑥、⑨
六五・一〇　陣地　『雲岡』六六・二　⑨
七五・一〇　征途上　『汾水』七六・六　⑨
七八・冬改　一个冬天的早晨　『雲岡』七九・二　⑥、⑨
七九・七　力量　『鍾山』七九・四　⑥、⑨
七九・九　老労模的牙疼病　『汾水』七九・一二　⑥、⑨
七九・九　〝愛人〟　『上海文学』八〇・七　⑥、⑨
八〇・一　光的追求　『雲岡』八〇・三　⑥、⑨
⇓『光的追求』序：馬烽　⑥
⇓『光的追求』后記：作者⑥（八〇・五・三于大同、八一・二・一〇于北京）
八〇・五　帰来　『汾水』八〇・一〇　⑥、⑨
八〇・七改　復蘇　『当代』八一・一　⑥、⑨
八〇・一二　焦祖堯小伝　『山西師院学報』八一・二
八一・一　栽種　『朔方』八一・五　⑨
八一・二　召喚　『人民文学』八一・七
八一・七　⑥『光的追求』（短篇小説集）江蘇人民出版社、三九二頁

八一・七　涼粉攤上　『汾水』八一・一〇　⑨
八一・九　起跑在黄土高原　『汾水』八一・一二
八二・二・四　温暖　『山西日報』八二・五・？　⑨
・必須突破〝車間文学〟的框框　『人民文学』八二・四（工業題材創作座談会発言選輯）
・発言『文芸報』八二・四（描写工業戦線上的変革和矛盾）
八二・四　心兒向着明天　『当代』八二・五　⑪（報告文学）
⇓『新華文摘』八二・一一
↓『山西文学』八五・七（山西省首届趙樹理文学奨　報告文学一等奨）
八二・四・二八　家在攀枝花　『山西文学』八二・一〇　⑪（散文）
八二・一二改　跋涉者　『当代』八三・三　⑧（八一・六初稿）
⇓⑧『跋涉者』（長篇小説）人民文学出版社、八四・四。二八八頁
↓『当代』八三・二「編者的話」
↓『当代』八五・一　鄭波光「致力于典型形象的塑造――論『跋涉者』」
↓『山西師大学報』八五・二　何鎮邦「一曲砿山改革之歌――評焦祖堯『跋涉者』」
↓『山西師大学報』八五・二「焦祖堯就『跋涉者』的創作答本刊主編問」
↓『山西文学』八五・七（山西省首届趙樹理文学奨　長篇小説一等奨）
↓『当代』八六・一　王汶石「関于『跋涉者』致焦祖堯」
↓『批評家』八六・三　潜入生活的深処――『跋涉者』創作回顧
↓『当代』八六・三（首届〝人民文学奨〟長篇小説）
↓『当代』八六・五　韋君宜「読『跋涉者』」
八三・二　長白毛的耗子　『山西文学』八三・五　⑨（工業題材短篇小説特輯）

八三・五改畢　這里是湛藍的天　『鍾山』八三・六　⑨⑩
八三・八　哦、鍛小小的槐樹院　『作家』八四・一二合　⑩
八三・一〇　胸襟　『山西文学』八四・一　⑪（報告文学）
八三・一二　采擷美的浪花　『中国煤炭報』八四・一・一四
八三・一二　壁立千仞　『山西文学』八四・六　⑪（報告文学）
八三・歳末　『復蘇集』后記・作者　⑨（于大同）
八四・六　火　⑪
八四・一二　学歩拾零——我的第一篇小説発表之前　『山西文学』八五・三
八五・二　堰橋人　『山西文学』八五・六　（散文）
八五・四　荒谷三題　『人民文学』八五・九
八五・五　晨霧　『山西文学』八五・八　（同題小説）
↓『山西文学』八五・八　枯棘「編稿手記」、一指禅「編稿手記」
↓『山西文学』八五・九　李国濤「読同題小説〝晨霧〟札記」
⇓『小説選刊』八六・二
↓『山西文学』八六・四（『山西文学』八五年度優秀小説）
八五・五　拉鏈皮包　『小説界』八六・二
八五・六　⑨『復蘇集』（短篇小説集）工人出版社、四二三頁
八五・八　把愛長留在人間——記烈士馬牡丹⑪　『山西文学』八五・一二（報告文学）
八五・一〇　説自己的話　『中学生作文』八六・一
八五・一〇　徜徉在鮮花和友誼的海洋——訪泰日記摘抄　『黄河』八六・二（散文）⑪
八五・一一　魔棒　『黄河』八六・四　⑩

↓⑩『魔棒』（中篇小説）中国文聯出版公司、八八・五　山西。　二五九頁
八五・一一　反常的人　⑪
八五・一一　回高山　⑪
八五・一二　犁　『当代』八六・三　⑪（報告文学）
↓『文芸報』八六・八・二　李彤「犁：中国知識分子的開拓――読焦祖堯的報告文学『犁』」
八六・二　一点読后感『山西文学』
八六・八　（田昌安短篇小説集『柳絮枝告状』代序）
八六・四　花環綴起的記憶　『山西文学』八六・七　⑪（散文）
八六・一〇　先人該是歓欣還是哭泣？『当代』八七・二〔〝改革大潮中的年軽人〟火鳳凰奨報告文学徴文〕⑪
八六・一二　青山夕照　⑪
八七・五　尋覓　⑪
八七・九　西巷春濃　⑪
八七・一〇　在改革的大潮中崛起　⑪
八八・一　難点：一種観念的改変　『文芸報』八八・四・三〇
↓『文芸報』八七・一一・七　陳冲「改革文学的難点」
八八・二　解放　⑪
八八・二　病房　『山西文学』八八・四
↓『山西文学』八八・六　蘇華「『病房』：心霊的探索与結構的更新」
⇓『小説選刊』八八・九
九〇・七　昨天和今天的故事　『山西文学』九〇・九
九〇・九・二六　弘揚趙樹理精神推進新時期文学――在山西省第三次趙樹理（国際）学術討論会上的講話（摘要）『山西文学』九一・二

九〇・一二　⑪『火、犁、人間和明天』（報告文学集）北岳文芸出版社、四五〇頁
九一・五　山西短篇小説的几个特点『山西文学』九一・七
九一・一〇　故壘西辺　『黄河』九二・一　⑫
⇓⑫『故壘西辺』（中短篇小説集）作家出版社、九五・九、三八五頁
九二・五　永遠走与人民相結合的文学之路――紀念馬烽、西戎、束為、孫謙、胡正文学創作五十周年　『山西文学』九二・七（評論）
九三・五　帰去　『人民文学』九三・一〇　（大同南郊）
⇓『小説月報』九四・一
↓『小説月報』九四・一　自在和不自在（創作談）
↓『文芸報』九四・二・一九　王巧鳳「霊魂的――読焦祖堯近作『帰去』」
九三・七　故人風雨　『山西文学』九三・一〇
九四・八　応該〝万歳〟的精神　『山西文学』九四・一〇　（散文）

（補記）焦祖堯氏本人の校閲が、ここまで済んでいる。忙しい中、校閲してくださった焦氏に感謝する。